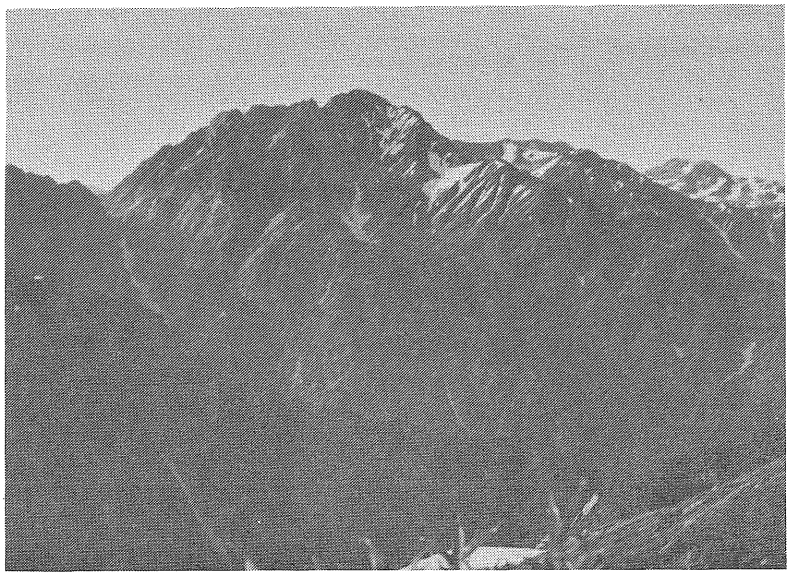
会　　報

1985

No. 17



猫又山から剣岳を望む　8月

KAC

神戸山岳会

目　　次

ＯＢの山行 …… 島田文雄 …… 1
１９８４年度　総会報告 …… 2
１９８５年度　総会報告 …… 2
合宿報告 …… 3
１９８３年１２月～１９８４年１月
　御岳　スキー登山 …… 幸内義孝 …… 4
　夏合宿　（剣岳） …… 幸内義孝 …… 5
　夏合宿　（剣岳） …… 国沢昭美 …… 6
　冬山合宿（剣岳） …… 小林利樹 …… 7
個人山行
　ブータンヒマラヤと私 …… 片山英一 …… 9
　秋山郷から鳥甲山 …… 数野満義 …… 12
　出合から滝谷第４尾根へ …… 吉田典夫 …… 16
　　大西章代 …… 17
　茶臼岳－光岳縦走 …… 国沢昭美 …… 20
　伯母子岳 …… 紀　千賀子 …… 21
　はじめての富士山 …… 吉田典夫 …… 22
　七種山 …… 島田文雄 …… 25
　鶏冠山から狛坂廃寺跡 …… 島田文雄 …… 26
　丹波篠山口の半国山 …… 島田文雄 …… 27
　杓子岳－白馬岳 …… 国沢昭美 …… 28
　東山－鳴滝山（残雪期） …… 米沢典之 …… 30
　鈴鹿（仙ケ岳） …… 島田文雄 …… 31
　玉置山 …… 島田文雄 …… 32
　コブ尾根 …… 国沢昭美 …… 33
　塩見岳 …… 幸内義孝 …… 35
　雨乞岳 …… 島田文雄 …… 35
　七種（薬師山） …… 島田文雄 …… 36
　京都北山（片波山） …… 島田文雄 …… 37
　伊賀（錫杖岳）５７４．７*m* …… 島田文雄 …… 37
　若狭　百里ケ岳と丹波　八が峯 …… 島田文雄 …… 38
　苧谷（おだに） …… 島田文雄 …… 39
　東播の善防山と笠松山 …… 島田文雄 …… 39
　白山より妙見山 …… 新川敏夫 …… 40
　能郷白山 …… 島田文雄 …… 41
例会報告 …… 44

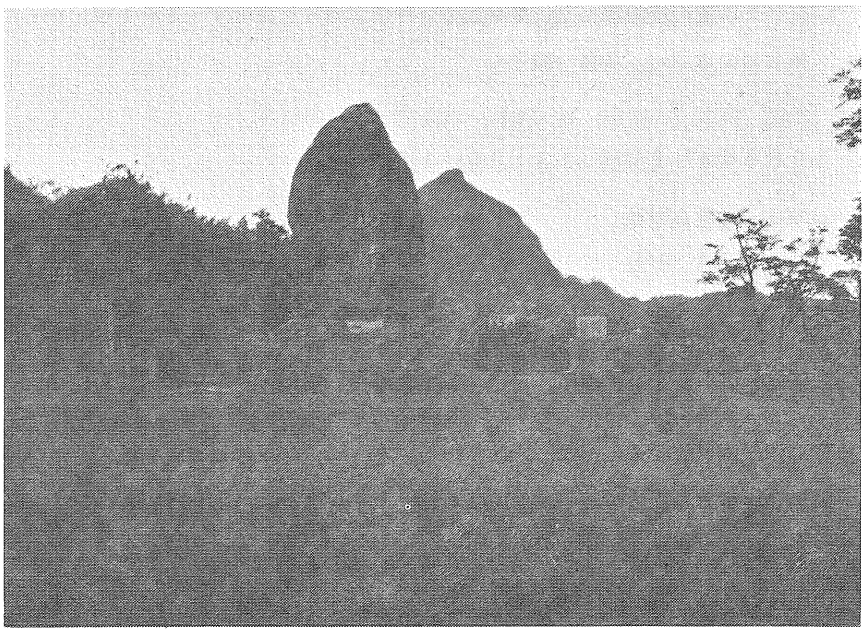
ＯＢの山行

島田文雄

会から、毎月届く例会通知を手にした時、自分の体力で参加出来そうな例会には、印をつけ参加するつもりでいるが、さて当日となると、若い人達の歩く速度に到底ついていけぬのだろうと思い、用意した弁当を持って、六甲や、帝釈の山を、歩いて居ります。

いつか木村ＯＢが、五十代には五十才の山が、六十代には六十才の山というように、年令に応じた山行があると、話して居られた事がありましたが、幸い私には新川君という良い相棒が居りますので、毎月一回位の割で、あちこちと山を歩いて居ります。

これらの山は若い人達でも、楽しめ又歩き方によっては、かなりハードな山行にもなると、思います。これからの例会には、たまには、このような山を歩いてみては如何でしょうか。



奥美濃

総　会　報　告

１９８４年4月１５日(日)　１３：３０～１７：００

神戸登山研修所２階

出席者　敬称省略

片山、島田、新川、内藤(保)、武田、田中、宮本、迫田、矢木、国沢、大西

堀田、岡崎、岸本、古賀、馬場、幸内

Ｓ５９年度の会長委員長の選出

会　長　片山　英一

委員長　岸本　光弘

副委員長　武田　禎

新役員の選出

装備　吉田、大西　会報　幸内、神田　会計庶務　矢木、国沢、大西

企画　小林、堀田、古賀、大西、幸内　リーダー会

会事務所　片山氏宅　〒６５７　神戸市灘区青谷町４－８－１５

新会員の承認　馬場　種子

１９８５年4月７日(日)　１３：００～１７：００

神戸登山研修所２階

出席者　敬称省略

片山、島田、新川、岡崎、馬場(芳)、藤本、丸屋、岡田、岸本、野上、田中、古賀

矢木、国沢、小林、迫田、吉田、広池、馬場、川辺、大西、幸内

Ｓ６０年度の会長委員長の選出

会　長　片山　英一

委員長　岸本　光弘

副委員長　武田　禎

新役員の選出

装備　吉田、大西　会報　幸内、神田　会計庶務　矢木、国沢、大西

企画　小林、堀田、古賀、大西、幸内　リーダー会　小林、迫田、古賀、岸本、幸内

合　宿　報　告

１９８３年１２月３０日～１９８５年1月４日

冬山合宿　　１９８３年１２月３０日～１９８４年1月２日

御嶽スキー登山　　メンバー　　迫田、吉田、幸内

ルート　　松尾滝→中ノ湯→剣ケ峰→中ノ湯→松尾滝

夏山合宿　　１９８４年8月１０日～１６日

剣　岳　　メンバー　　迫田、広池、国沢、馬場、種子、大西、小林
吉田、幸内

ルート	１１日	黒部ダム→真砂沢　　ベース	
	１２日	源次郎尾根→本峰→平蔵谷→ベース	迫田、広池、大西、国沢 馬場、種子、幸内、堀田
	１２日	源次郎Ⅱ峰Ｃフェイス	迫田、広池
	１３日	源次郎Ⅰ峰　中央ルンゼ→成城大	小林、大西
	〃	源次郎Ⅰ崎　中谷ルート→名古屋大	吉田、広池
	〃	八ツ峰上半→本峰→剣御前→剣沢	国沢、種子、幸内
	〃	八ツ峰Ａフェイス	堀田、迫田
	１４日	ベース→池の平→宇奈月→帰神	迫田、大西、広池、堀田
	〃	ベース→剣沢→室堂→帰神	国沢、小林
	〃	ベース→黒部ダム	吉田、種子、馬場、幸内
	１５日	黒部ダム→針ノ木峠	吉田、種子、幸内
	１６日	針ノ木岳→扇沢→帰神	〃

冬山合宿　　１９８４年１２月３０日～１９８５年1月

剣　岳　　メンバー　　岸本、小林、吉田、馬場

ルート　　３１日　伊折→馬場島　１日→伝蔵小屋→２日傍タイ→３日頂上往復

４日　伝蔵小屋→馬場島→帰神

御　　嶽

幸　内　義　孝

昭和５８年１２月３０日～昭和５９年１月２日

パーティー　（L）迫田　　吉田　　幸内

今年の冬山計画は、北岳から塩見岳への縦走と決まっていましたが、ちょっとしたことで、つぶれてしまいました。急遽変更して御岳スキー登山となりました。

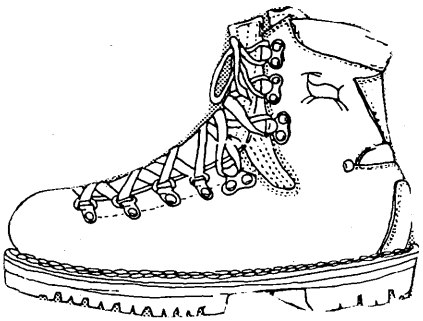
計画は、木曽福島からスキーをはいて行き又木曽福島までということでしたが、駅につくと、関西は雪が多いのに、こちらは全然ありません。タクシーで４合目迄入ると、少し２０㎝程度の雪です。御岳は突風がすごく、独立峰なので山肌は青氷と聞かされていたので、アイゼンは、ピンピンに砥いで行きました。でも天候に恵まれ、アイゼン無しでも行けるのでは、という感じでした。なんせ暑くて、シャツ１枚になっても暑くて、日陰で休むといったぐあいです。ずうと、御岳頂上の水蒸気が真すぐに立ち登っていました。

最高の天候に恵まれ大変よい山行でしたが、南アルプス縦走がこわれたのが残念でした。

コース　　３１日　木曽福島→タクシー→松尾滝→七合目小屋

　　１日　　七合目→頂上→七合目

　　２日　　七合目→下山→帰神



夏　合　宿　（剣　岳）

幸　内　義　孝

昭和５９年8月１０日～１６日

パーティ　　小林、迫田、吉田、大西、国沢、馬場、広池、堀田、幸内、種子

黒部ダムに着いた時、ずっと前、雨の中をキスリングを背負って、しんどかったことを、思い出していました。今日はよい天候に恵まれ、ルンルン気分で、黒部川をながめています。
丸山東壁の下で、壁を見上げたり、空を見て大の字になって、川の流れを聞いて、たいへんよい気分でした。内蔵助平でちょっと道をまちがって、馬場君とはなればなれになり、１時間程のロスでした。私達は大勢だったが、馬場君は、大変心配だったでしょう。このごろ例会にしても、本番にしても、いっしょに並んであるくということは、あまりしなくなり、自分のペースであるくようなことが多くなりました。でも本番は、弱い人に合わせて歩かなくてはと、反省しました。
ハシゴ谷乗越しをこえ真砂沢へと行きました。（ＢＰ）

１２日は、みんなで源次郎尾根へ行きました。落石があって、第一歩からヒヤッ／としました。でも運よくけがもなく、Ⅱ峰のコルへ着きました。下の方に水があったので大変たすかりました。岩をよじる計画でしたが、疲れが出てパスしました。迫田氏と、広池氏は楽しそうに岩をよじていました。
本峰を経由して、平蔵雪渓を、降りました。（ＢＰ）

１３日は、Aフェイスを登る人達（迫田、堀田、馬場）といっしょに楽しく、五六のコルへと行きました。私達は八峰上半の縦走です。たくさんの人達が岩をよじっているのを横目で見ながら行きました。大変ビックリしたのは、八峰縦走でも、岩登り完全装備で縦走していることと、ちょっとした所でも、エイトカンで、懸垂下降していることでした。
本峰を経由して、一服剣当りで、雷りが鳴り初めて、あわてて下へ下へと下りました。黒ユリのコル当たりで、前田さんが亡くなられた方を向いて、手をあわせました。
剣沢を早足でおりた。（ＢＰ）

１４日は、人それぞれの方向へと下山です。私達は（吉田、種子、馬場、幸内）、ハシゴ谷を、越えて、ダムへと、ダムに着くと、ミーチャン、ハーチャンで、いっぱいです。バスを横目で見ながら、黒部湖畔を、歩いて行きました。

山小屋でコーヒを飲んで。水をもらって、川岸でテントを張りました。
空は満天の星。時々流れ星もあって、おとぎの国のようでした。焚火をして、夜おそくまで、星をみつめていました。

１５日は、馬場君と別れて、一路、針ノ木峠へと、遠かったけど、明るいうちにつきました。

１６日は、針ノ木岳に登り、剣岳を眺めました。源次郎Ⅱ峰が大きく見えました。
針の木岳からの風影は、北アルプス全容が眺められ、大変よかった。新人の時に一度来たことあるが、しんどかったという思い出はあっても、針ノ木岳からの、天望は覚えていませんでした。針ノ木雪渓を走って下り扇沢へと行き、帰神しました。

夏　　合　　宿

国　沢　昭　美

昭和５８年に続いて、今年も夏合宿は剣岳であった。昨年は西面、今年は東面と剣岳の一応の概念把握が出来ました。

今回は、岩稜帯の縦走と登攀ということであった。私も、八ツ峰、源次郎両尾根の縦走、源次郎二峰Ｄフェース、八ツ峰六峰Ｃフェースの登攀と大変欲ばった計画を立て、夏合宿に向けて自分なりに練習を重ねました。結果としては、両尾根の縦走だけに終ってしまいました。

その原因として、自分自身の登攀意欲と体力の弱さ、そして計画のミス（限られた日数内で自分の一番やりたいことを中心とした計画）があったと思っています。しかし、両尾根の縦走は、変化に富んだ苦しいながらも楽しいものでした。源次郎では、水が無くてバテてしまい、二峰登攀をやめてしまいました。八ツ峰は、真砂沢から五・六のコルまで雪渓のアプローチ、そして剣山頂から剣沢へ出るという長い縦走でした。縦走中眺めた八ツ峰のフェース群、特にポピュラーなＣフェースは、すごい人だかりでした。少し時期をずらせば嘘のように静かになるのでしょうが。また機会があれば、登攀もしてみたいと思っています。前にも記したように二年連続して剣岳に登ることが出来て、とてもラッキーだったと思っています。

それから今合宿期間中、連日遭難がありましたが、私達パーティーは全員無事に下山出来て本当によかったと思っています。

最後に、食料係として、ギリギリの食料で余裕のない計画だったことを反省しています。

冬　山　合　宿

小　林　利　樹

期　間　　１９８４年１２月３０日～１９８５年１月４日

メンバー　岸本光弘、吉田典夫、馬場孝、小林利樹

今冬の合宿は、剣岳早月尾根に決定し、最終的には、４名と少し寂しい合宿になってしまったけれども、４名が一丸となって事故のない山行にと、計画を練りました。

今年は暖冬気味だと気象庁の予報でしたが、年末に大きな寒気団がやってきて、集中的に雪が降り一時はどうなることかと思いましたが、まあ行ける所まで行って、ダメであればすぐに引き返せばよいだろうと、云うことで列車に乗りました。

１２月２９日　大阪駅に４名が集まったが、北陸地方は年末寒波の雪害のために、運休列車がほとんどで、唯一「北国」だけが富山まで動いていてこの列車に乗り込む。この調子だと伝蔵小屋まで行けたら上出来だろうと、皆んなで話しをしながら、岸本さんがもってきた「ゴマメ」を肴にウイスキーを一本半程あけてしまう。このウイスキーの飲みすぎで、あくる日はいつものように睡眠不足もかさなって、大変なめに、なってしまうのです。悪いくせです。

１２月３０日　富山駅に着くと、町は雪が降っていて、また心配で、タクシーはどこまで入るのだろうかと、痛い頭で考えているのです。地鉄が動くまで、コーヒーやジュースでのどの渇きをしずめるが、一向になおらないし、気分は悪いし、いつもながら最悪です。

上市駅でタクシーに乗ると、伊折までは除雪してあるということでホッとする。

伊折からは、トレースがあるので少しは楽であるけれども馬場島まではやはり長いなあ。

青少年センターで朝飯を食べる。けれども少し休憩するとすぐに寒くなってくる。

今日の予定は、松尾平まで行こうと思ったけれども、馬場島に着くともうイヤになって、テントを張ることにする。研修センターで、計画書を提出し、センターの下でテントを張らしてもらう。ここは地面かコンクリートなので、雪の上よりは大分ましである。

水もセンターの人にもらい大いに助かりました。

伊折　８：００　　馬場島　１１：４０

１２月３１日　今日は大晦日です。下では正月料理作りに忙しいことでしょう。

まずは松尾平までの急坂からの始まりです。ここは一気に登っているので、大変疲れるところです。松尾平の平担地をたどり少し行くとまた急坂です。あ～しんど。

２１６０m位の所でテントを張る。雪が降っているので整地するのも疲れます。

テントの中では紅白歌合戦を聞き、ゆく年くる年を聞きながら寝る。

馬場島　８：００　　２１００m　１４：３０

１月１日　明けましておめでとうございます。時計をみてびっくり、なんと６時ではないか、全員夜ふかしがすぎ寝すごしてしまいました。これは大変です。

昨夜の雪で、トレースが少しうまっていますが、トレースをはずさなければ下が固まっているので大丈夫でしょう。伝蔵小屋に着くとまだ先行パーティーは２５００m位の所で、ラッセルに大変難渋しています。遅いパーティーがいて、何でもない所でもザイルを使っているので、あとのパーティーはじ　ずつなぎになり、時間ばかりすぎ多くのパーティーが途中で引き返しました。

僕達も２８００m位の所で時間がないので引き返す。朝の２時間がくやまれます。

帰りは特急便です。

２１００m　８：００　　２８００m　１２：００　　２１００m　１４：３０

１月２日　今朝も天気が悪いし、これでは本峰もだめかなと思うけれども、いける所まで行こうと出発する。昨日ほとんどのパーティーが引き返したので、本日早月尾根は満員です。

天気のほうはだんだんとよくなってきて、もうしぶんなしです。しかし時間待ちのために寒いのには少し困りものです。頂上に着くころには天気も快晴近くなり大変よかったです。

今日中に馬場島まで降りるので帰る足取りは早いものです。

馬場島山荘の新館の所で、今日は泊まる。ここにも水があり、食堂があり、下界にいるのと変わりません。まずはビールで乾杯。

2100m 6:30　TOP 11:00　2100m 13:00～14:30　馬場島 16:30

１月３日　今朝は食堂で朝定食を食べて、寝袋を干し、気分もゆっくり、もうこれだけゆっくりすると伊折まで帰るのがイヤになってきます。

チンタラ、チンタラと伊折へと歩みを進めて今冬の合宿の終りです。

ブータンヒマラヤと私

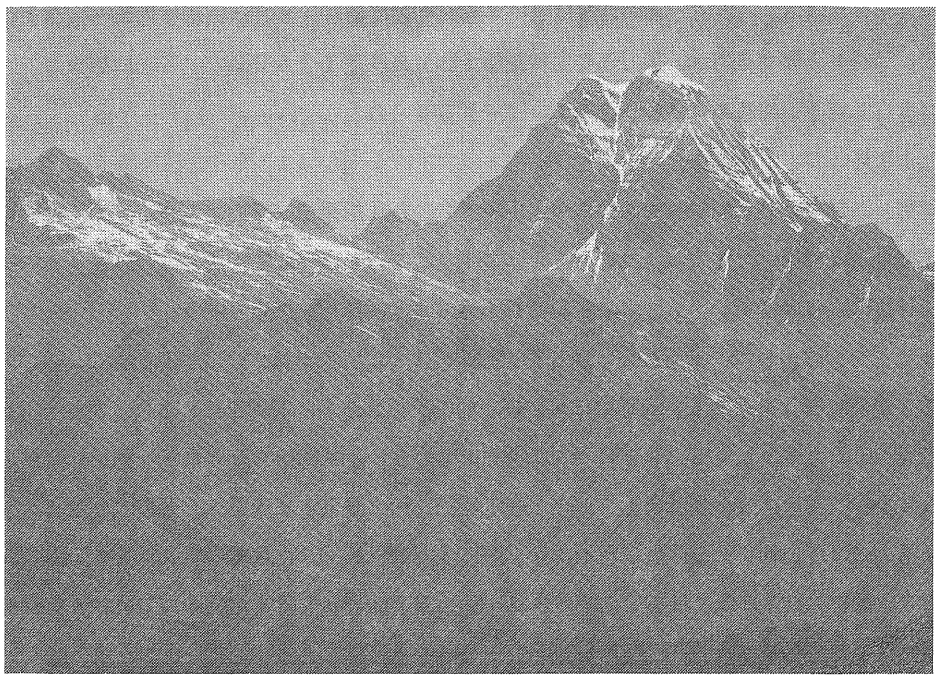
片　山　英　一

１９７９年4月の月末から5月初めへかけてのゴールデンウィークに、ブータンへ蝶を採集に行くグループがあるのを知って参加を頼み込みました。一行は蝶を採るのが目的だが私は、ブータンヒマラヤの連峰の一端を覗くことさえ出来れば、満足だとしての参加でした。成田からカルカッタへ飛び深夜の入国と通関手続きを終えて空港近くのホテルで印度での一夜を明かしました。翌朝のバグドグラへの空の便を空港で待ったのでしたが、これが何かの事故で大巾に遅れてバグドグラへ到着したのは夕方近くなってしまい、ブータンからの出迎えのマイクロバスが国境のプンツオリンへ向って走り出したのは、もう薄暗くなりかけてからで、その上、激しい雷鳴を伴った夕立ちの中でありました。この飛行機の遅れが私達には思いもよらなかった幸運となりました。物凄い蛍の大群の中に突入し真黒の闇の中の蛍の光の海をひたすらに北へ北へと、走りました。激しく鳴り響く雷鳴と暗闇を鋭く引き裂く青白い稲光りの中を走る車は、夢のような淡い紺色に光り輝く、そして見渡す限りゆったりと流れてゆく大河の流れのような蛍の光の海の中にバスと共に私共の身体を浮べておりました。それは生れて初めて経験する。そして恐らく、再び出逢うこともないと思われる恍惚の夢心地の中の、蛍光の幕の中空を漂う旅でした。

私とブータンヒマラヤの山々との出逢いは全く偶然なものでした。大体蝶々は深い樹林の中の、美味しい水のある流れの傍らに、朝の日の出の後と、午後の日没の前に集まって来るもののようで、山の写真を撮った。私が蝶を採るグループに入ってしまったのがそもそもの間違いだったわけでした。何日間も山の見えない旅の日を重ねました。そして旅の終りに近い頃首都テイムプーから北の山の上のパジョディンの村へ、そして更に高みへ登って幻しのヒマラヤの白い蝶を探す為一行は馬を揃えて出発しました。然し３８００m近くまで登ったパジョデインの村のあたりは、まだ石楠花の開花には早過ぎ、蝶の飛んでいる気配は全くありませんでした。蝶採集の一行は直ちに馬を返して下山してしまいましたが、私と他に３名は翌日更に高く登る為、王様の狩猟小屋に残り一泊しました。明けての5月６日は私の６２回目の誕生日でしたが、明から爽やかに晴れ上り、モンスーン入り近くの重く厚く山の上にのしかかっていた連日の鼠色の雲がカラリと取り除かれ雲のかけら一つない青空となりました。馬の背にゆられ乍ら、４０００mを超えて、タルチョ（経文旗）の群立する鳥葬の岩峰を超えて凡そ４２００m位の稜線の上に出た時、北西方に実に鮮やかな雪線を蒼穹に画いた「チョモラリー（７３１５m）

と、「クンドカン（6100m）が並んでおりました。慌てて馬から下りて、何枚も何枚も２台のカメラに収めました。チョモラリーはすでに登頂されておりましたが、胸を張って中天に突っ立った男らしい岩峰のクンドカンの、猛々しい姿に心をひかれ、何つの日か、何んとかして此の山を登攀の対象としてみたいと胸に刻みこみました。私はこの１日の収穫で、やっと、心を充たされ、約３週間の、そして初めてのブータンの旅を終えました。この時のガイドはソウナム氏でした。ブータンヒマラヤに憑かれた私は帰国してすぐに西遊旅行社を通じて、チョモラリー周辺へのトレッキングの許可を申請しました。そして翌年１９８０年に神戸から山好きの人達を集めて２回目のブータンへ、そして今度は山へ入る為の旅に出かけました。前田浩氏を隊長に、私と長島氏、小川氏、寺本氏、藤田氏、浅野夫人、時来通信の筒井氏の８名と、添乗員の、日本山岳会のチョモランマ登山隊の隊員に加わった伊丹君の９名でトレッキングに出発しました。この山旅の何日か目に美しい氷河期を前景にして素晴らしい三角錐の氷壁を紺碧の大空にくっきりと画きあげた雪の山を目にしました。ガイドのニマ・ドルジエから「ツエルム・カン」（６９３５m）と教えられました。チョモラリーのベースキャンプと称せられる「ヂャンゴタン」は此のツエルムカンの氷河のモレーンのすぐ下方にありました。谷の真正面に鋭く美しい氷雪の三角錐が突っ立ち、左手奥の方にチョモラリーの大きくゆったりとした山容の氷河が、それから山頂へ連る雪稜をのぞかせておりました。私は此のあたりで高山病に、突然やられたようでした。トレッキングは更に「ギル・ラ峠」を越えて「リンシ・ゾン」へと進む予定だったのでしたが、私の為に、パロ・チュ（河）に沿った林道を「ドゲ・ゾン」へと引っ返してしまい下山しました。一行の皆さんには申し訳なく又本当に残念な思いで一杯でした。１９８３年の春、田部井淳子さんを隊長とするブータンに到達して「ジチュダケ峰」の登頂に挑戦されましたが、その報告会を聞きに行って、私達が１９８０年に見上げた氷の巨大な美しい三角錐が「ツエルムカン」ではなくて「ジチュダケ」（７０１０m）であった事を知らされました。何度も首をかしげた事でしたが今だに信じ難い思いです。１９８３年秋、私は３度目のブータンへ旅をしました。その時首都ティンプーから東の方へ「ドチュ・ラ峠」を越える時、素晴らしい晴天に恵まれて、北の方はるかにブータンヒマラヤの雪の峰の連りを望見することが出来ました。その時のガイドのカルマ・ドルジエに山の名前を尋ねたのですが「クーラカンリ」だとか「ガンケルブンツム」の名を教わりました。岩峰の山頂に三つの岩頭のあるあれは３人兄弟と言う山でガンケールブンツム（７５４１m）の名があると語っていました。私は彼にクーラカンリはチベットの中に入っていてブータンの山ではないんじゃないかと言ってみたのでしたが、彼は一言のもとにこれを、否定しました。望遠レンズで、何枚も何枚も、念を、入れて撮影しました。１９８０年の時の「ツエルムカン」を１９８１年の年賀状に、印刷しましたが、この「ガンケルブンツム」も１９８４年の年賀状に、印刷して　　山の名と、

高度を、刷り込みました。処が、１９８５年の春になって、西遊旅行社の脇田氏から、電話を貰って片山さん大間違い、あの年賀状の山は、「ガンケルブンツム」ではなくて、「マサカン」（約７２００m）でしたよとの事で、唖然としてしまいました。今年ブータン政府から、山名とその登山の許可が、発表されました。あのガンケルブンツムと、間違った「マサカン」は、京都大学に、そして本物の方の、ガンケルブンツムは、アメリカ隊と日本のヒマラヤ協会に決まったとの事でした。そして今年新たに、約７０００mの「チャンラカン」が、オープンになりました。あの「クーラカンリ」は、朝日新聞の報道によりますと、神戸大学隊が、中国のチベットからの登山が、許可になったようです。私は、神戸山岳会の登攀の対象の山として、先に１９７９年に撮影した「クンドカン」を、ブータンの観光局宛に、申請をしてみましたが、あの山は、中国との国境線上に、あるからとのことで、許可になりませんでした。今年中に、もう一度、ブータンへ出かけて、山を見つけ、入山の許可を、申請したいと念願しています。何んとか、今年中に、山を決めて、来年は、登路偵察の為のトレッキングを行い１９８７年の登頂を計画したいものと念じて居ります。ブータンヒマラヤは、地図も皆無と言って良く踏査も行なわれていませんので、山の名前も高度も頼りないものです。全く処女地での探査行になるので、その意味では真の、バリエーションルートであり、価値高い山行が、楽しめる現在地球上に、残された唯一の高山地帯と言えましょう。神戸山岳会の隊員の手によって、その一部が、解明される意義ある登山の完成される日を、楽しみにしています。



クンドカン　6,100m

「秋山郷から鳥甲山」登山

数　野　満　義

パーティー：数野満義吉子

奥志賀の流れを集めた雑魚川、野反湖を発した魚野川が切明で合流し、中津川となって、信濃川に注いでいる。この中津川渓谷を挟んで、長野県側に島甲山（２０３８ｍ）新潟県境に苗場山（２１４５ｍ）が対照的な姿で対峙している。　この渓谷沿いに点在する部落は、平家の落人部落といわれ、深い渓谷と険路、更に５ｍに達する豪雪に閉ざされ、やっと江戸末期、越後塩沢の鈴木牧之が、この秋山郷を探訪、「秋山記行」を著わして知られた。

天保、天明の飢饉で全滅した部落もその跡を止め、又、Ｓ１２年迄、義務教育免除地という程の僻地である。

丁度２１年前の晩秋、当時のバス終点、見玉から徒歩秋山郷を遡り、河原から湧き出た切明の湯に浸り、翌朝新雪の笠法師山　烏帽子岳岩菅山を越えて、発哺温泉に抜けた。その折、渓谷の右手に鷲が両翼を広げ、秋山郷を抱え込む様にそびえ立っている鳥甲山の雄姿に深い感銘を受けた。　特に正面の岩壁は谷へスッパリ削げ落ち、稜線は鋸歯状に頂へ突き上げていた。谷から仰ぐ迫力は、頂上迄の直線距離３Ｋｍ　高度差１３００Ｋｍで　容易に想像していただけると思う。何時か登ろう。との願いが今回達せられた。

１１月３日　晴のち雲

早朝、上野駅より上越線経由飯山線の入山予定で急行に飛乗る。車内で切符を求めると、年老いた車掌は料金が、すぐ分らないとみえ、後廻し、やっと高崎駅停車中に現われ、「先の台風で越後田沢一津南間は、土砂崩れで現在も不通です」と言う。発車も迫り、確認の余裕もなく、とっさに津南へは、長野経由しかないと判断、あわてて靴をはき、荷物をかき抱え飛び降りる。後続の特急に乗換え、長野駅に着いたものの便が悪く、２時間も待たされ、津南へ向う。どの道１日３本しか入っていない終バスには間に合わない。駅前からタクシーを利用、紅葉の終った渓谷の細い、しかし舗装された道を約１時間、和山温泉、仁成館へ夕暮に辿り着く。

頂稜厚く雲に覆われ、その全貌は望めない。宿には湯治、茸採り、旅行者等は見受けるものの登山客は我々だけである。この宿の老主人は、奥信濃で唯一人の日本山岳会員で、我々が登る白嵒尾根の開拓者でもある。

１１月４日　雲時々薄日

雲天模様乍ら、辺りがうす明るくなり、宿の主人に見送られ、中津川を対岸に渡る。一軒ある民家脇をすり抜け、作業道を登り秋山林道に出る。右は前倉部落に通じ、左手は奥志賀に伸びている。貉平から電光型の急坂となり、ひと汗流すと痩せた白嵒尾根に出る。

左手眼下、雑魚川沿いに地肌のむき出た林道が樹林帯にのたうっている。小水沢の頭から急峻な岩混りの痩尾根が続いている。高度を稼ぐに従って、両側は切れ込んでいるが、谷にガスが流れ、高度感はない。やがてコメツガ、大シラビソ　姫小松の原生林の登りに変り、ホッと緊張感から解放される。辺りは、雪も１５㎝程、根雪となって積っている。白嵒から少し降りると、いよいよこの尾根の核心部、剃刀岩だ。左側は急な樹林帯、右手は白嵒沢へ垂直に切込んでいる。足場は組まれているが、雪が積っていて気は許せない。幸い雪は凍っていず、足元はしっかりしている。又要所には針金が張られているので助かる。これを越すと、まさに名が示す通り、赤茶色の、剃刀の刃の様なリッジが続いている。左側は崩壊して、谷深く落ち、右手はガスの間に、見える限り切れ込んでいる。ルートを右に採ると、頭上から針金が下っているが壁に登った形跡がない。下をのぞくと、雪のバンドが走り、ワイヤーが固定してある。

足元に注意し、トラバースし終えると、垂壁に鉄バシゴが懸っている。それを登り切ると、剃刀の刃の渡り終えた、狭い所に出る。しかし道はそこから断崖で断たれている。ルートを探り思案してみたが、どうやら先程上部から下った針金は古いルートで、一担このリッジに出て刃渡り後、ハシゴを伝い降りたらしい。間違いに気付き、再びトラバース終了点に降ると、やはり下のコルにルートが続いている。それにしてもよくこんなルートを拓いたものだ。しばらくすると、再び一枚岩が現われ、ワイヤーの張られたバンドを左上する。この頃からガスも切れ始め、山頂が間近にそびえている。やがて尾根も広まってきて、森林帯をゆっくり登ると、屋敷からのルートに合流する。二等三角点の頂上は３６０度眺望が効くとはいえ、相憎の天気しかしガスの切れ間に、東隣にゆるやかな頂稜の苗場山、南東には佐武流、白砂の山波、更に南には鳥帽子、岩菅の連山が続き、その右手になだらかな焼額山、又坊主頭の笠ケ岳、その左に横手山が望まれたのは幸いであった。記念写真を撮っていると、ガサゴソと獣の動く気配がし、声高に話してみると静かになった。辺りに甘酸っぱい、何か発酵した臭いが漂ってくる。頂上を後に屋敷へと向う。しばらく下ると、男２人連れのパーティーに今日始めて出会う。

我々と逆コースで和山に降りるそうである。道は登りと打って変り、樹林帯の下りである。

又籔の中で大型の動物の気配がし、山頂で嗅いだ臭いがしてくる。果して熊か、カモシカか？正体を見せない丈に気味悪いが、さりとて熊なら、御免被りたい。赤嵒の頭を左手にまき、ぬかるみ道に足をとられ、尻餅をつき乍ら屋敷山手前の鞍部に着く。そこからは、涸沢の物凄い急な下りとなり、更に枯葉がぬかるみ道を覆って、歩きにくいこと、この上ない。

水色、茶色のトタン屋根が見えだす頃、やっと道もゆるやかになり、コンクリート造りの砂防提に辿り着く。更に落葉を踏みしめ下ると、程なく秋山林道に飛出す。尚、踏跡を辿り、ワサビ畑を抜けると、冬仕度の屋敷部落に着く。中津川は架橋工事中で、傍らの事務所で電話を借り、宿に下山連絡すると、車で迎えに来てくれると言う。宿の温泉に浸り乍ら、今日辿ってきた白嵒尾根の眺みは、又格別であった。

出発（5：40）日嵒（9：35）頂上（11:20）赤嵒頭（12:05）屋敷部落（15:00）

11月5日　晴

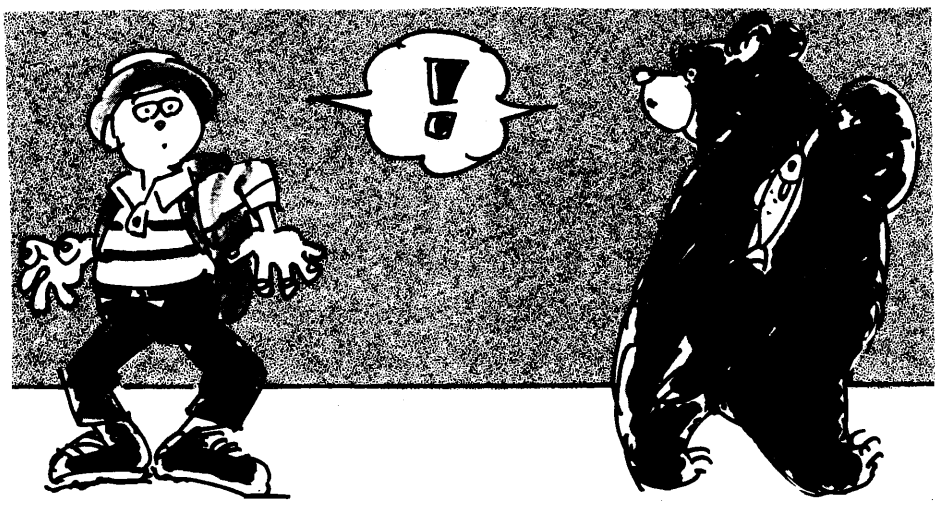
和山、仁成館（7:00）　清水川原（13:40）

既に11月3日から、小赤沢、見玉間のバスは冬期、運休している。宿の人は、津南に行くので車で送ると言ってくれるが、折角の秋山郷、弁当を作ってもらい歩くことにする。旧草津街道は、途中車道で途切れてはいるが、和山　上の原間と大赤沢、中の平（廃村）見倉までが昔のまま残されている。大赤沢からの道は、今は殆んで利用されていないのか、踏跡も途切れがちである。しかし山腹につけられた道は、遅い紅葉が溪谷に映え見事であった。大赤沢　中の平間は熊が出没するのか、等間隔に一斗缶がぶら下り、打ち鳴しながら歩く。見倉部落は戸数4戸、茅葺の民家が現われた時、タイムトンネルをくぐり、江戸時代に舞い戻った様な錯覚に陥った。まさに鈴木牧之の「秋山記行」の絵そっくりの光景であった。清水川原から作業トラックの荷台に乗せてもらい見玉へ出る。見玉からスクールバスに便乗し津南町に辿り着く。時刻表のバス路線には載っていなかったが、森宮原、津南、十二峠経由、湯沢まで越後交通バスが走っており、その夜遅く帰宅する。

「秋山郷の熊の話」

屋敷部落へ下ってきた時、飯場の人から、「熊に出合わなかったか？」と問われ「いや！」と答えると、不思議な顔をしていたが、宿に帰って話を聞いてみると、成程納得がいった。今年の秋は、特に熊の出没が高かったそうで、8月から9月にかけて秋山郷で20数頭も捕獲したそうである。和山部落内でも熊に追いかけられた人、白嵒尾根を登っていて熊と出くわし引返した登山者、今年は野兎より熊を見掛けた方が多かった。と平然と語られたのには恐れ入った。又秋山郷は辺境の地である為、熊を見付ければ、即捕獲しても良く、後で舌を切取って役場に届ければ良い、とのことである。今年は特に数多く出没した為に、部落でも熊退治に1斗缶を切り、内側へ折り曲げ、中に蜂密を塗って放置しておくと、首を突込んだ熊は缶が抜けなくて、眼の見えないまま、あちこちの木にぶつかってカンカン鳴り響いたという。宿の前の河原にも一斗缶をかぶった熊がころがり出て、射殺されたそうだ。手で抜けそうなものだが、熊は手前に引く力は強いが、外へ引張ることを知らない、と宿の人は話していた。又熊の胆は

上の原部落で水に溶かし、１杯千円で売っているが、これを飲むと痛みはとれるが、麻酔が効かなくなるそうである。熊の生息地は特に、苗場側、川周辺、魚野川沿いに多いらしく、岩魚を釣りに行く時は、杖で木をたたき乍ら歩くのだと話していた。秋山郷の熊狩りは、天保年間に住みついた秋田マタギの親子が伝承したと言う。



出合から滝谷第４尾根へ　　吉田典夫記

日　程　Ｓ５８．９．２３～２５

メンバー及び計画　　Ａ班－内藤②、迫田　　Ｂ班－内藤①、小林、広池、大西、吉田

Ａ班は上高地－涸沢－南稜テラス（泊）翌日、Ｂ班と合流して、滝谷ロッククライミングの後、日程が許せば、西穂まで縦走し、帰神。

Ｂ班は新穂高－滝谷出合－４屋根－南稜、Ａ班と合流

悪天の場合を考えて、奥穂の小屋を連絡先にする。

２３日　朝、新穂高温泉より滝谷出合をめざしてスタート、途中、錫杖の岩場がそそり立っている。すごい迫力、内藤さん、小林さんがどんどんとばす。必死のパッチでついて行く。かんじんな時になってスタミナがきれてしまうんではないかと心配。

出合着、思ったより広くてあかるい感じ。はるか上に茶色く、ドームが見える。なんかもろそう。芦屋ロックガーデンにあるのと同じ藤木九三のレリーフの前で　ハイ／ポーズ

左岸の小高いところに避難小屋。内はクラーイ感じ。

まばゆいばかりの河原をのぼって行くとしばらくして雄滝が見えてきた。登はん具をつける広池君とジャンケンで先に行くのを決める。１ピッチ目は広池君、瀑身の左側を行く。前日の雨でホールドがぬれている。ザイルオーダーは、広池－僕、内藤－大西－小林の２パーティーで。ザイルをフイックスしてスピードアップをはかる。

２ピッチ目は岩とブッシュのまじったルート。残置のフイックスが何本か垂れている。

３ピッチ目、本当は右へトラバースして瀑身へ降りるのが正解だが、競走馬みたいにまっすぐ行く単細胞クライマーの僕等は、登りすぎて、１本の木の上に２人とも追いあげられて、けんすい下降する。下では小林さんらがいらいらしながら待っててくれる。入れこみすぎ。

雄滝を越すとガレ場になる。

ナメリ滝　　１ピッチ目広池君。バンドまであがりザイルフィックス。先行パーティが石をボンボン落とすので、内藤さんが注意する。２ピッチ目吉田。ここでまたルートをまちがい、左側のややこしいところを登ってしまう。瀑身左側に垂れている赤いザイルぞいにスラブをあがれという小林さんのアドバイスを聞いたように思うのだが、ついむづかしい方へ行ってしまった。小林さんが何を言っているのが見えるのだが、滝の音で全くききとれない。

数ピッチ、スラブを行く、それから、猛烈なガレ場、まさに岩の墓場、四つんばいになって進む、合流点まではだいぶ遠く思えた。

合流点に着く。ガスははれており左からＡ沢、Ｂ沢、Ｃ沢と指をさして確認できた。

めざすＣ沢はせまい沢である。ここからスノーコルまでがまた思いのほか長く、途中、ザイルを使う箇所や、チョックストーンのつまったところなどがあり、あまりにも遠いので不安に

なるところだ。やっと右上にスノーコル。もう陽もくれかけている。ツエルトが2つはれるぐらいのせまい所で、すでに先行パーティが居たので第4尾根の方へすこし上がった場所で泊る。

両側が切れているのでザイルでセルフビレーをとる。つかれているせいか歌をうたう元気もなく居眠ってしまう。夜どうし風と小雨にもかかわらず、ぐっすり。今ごろ南稜にいる内藤さん、迫田さんは風雨にたたかれているだろう。

24日 予定どおり第4尾根を行く、すこし岩がぬれているので、40mいっぱいザイルをのばせない。確心部のDカンテまでは岩がもろく慎重にならざるをえない、不安があるとハーケンを打ったりAOを使ったりしたので、時間がかかる。乾いていると快適だろう。

ツルムのコルあたりまでくると風がつよく寒い、はやく抜けたいが思うように進まない。

最終ピッチ、ぬれていてズルズル、小林さんはよく登ったと思う。最後に僕がハーケンを回収しながら行く、終了点につくと、青いツエルトが張ってあるだけで、だれも見あたらないので、きょろきょろしていると、そのツエルトの中から見たような顔がのぞいている。寒いので僕があがってくるまで待っていたとのこと、全員握手をかわし、労をねぎらう。

南稜でA班のツエルトをさがすが見あたらず、我々もこの天候では南稜泊りは無理と判断して、北穂小屋に入る。ここまでまる1日かかってしまった。小屋に入ってしばらくすると奥穂の小屋にいるA班の人より電話が入る。台風10号が接近しているため、明日は涸沢で合流し上高地経由で帰ることにする。条件が悪い中で、長時間かかり4尾根をのぼり切った安堵感からつい集中登山であることをを忘れてしまったのを反省する。

涸沢では、ナナカマドがすこしではあるが色づきはじめていた。

松本のすみえ食堂で食べたカレーライスと野菜いため定食、しめて700円。あまりの安さにうれし涙が出た。

今回の山行で、ルートファインディングの未熟さ、総合力（ガレ場、岩場などのこなし方）技術力（ハーケンの打ち方、抜き方、ザイルのフイックス方法、ぬれた岩場の登り方）について良い勉強になりました。皆さんありがとうございました。

最後に拾いもの　八ミリザイル赤色　10×2本　使用可能

O型カラビナ　1つ（ツルムのコルで吉田がひらう）

滝谷　第4尾根

大　西　章　代

1983年9月22～25日

メンバー　小林、内藤(1)　吉田　広池　大西

9月22日　大阪発

23日　新穂高－滝谷出合－スノーコル

２４日　第４尾根ー北穂小屋

２５日　北穂小屋ー涸沢ー上高地　　涸沢にて　内藤(2)　迫田両氏と合流

夏合宿でチンネ左稜線を登り、少しは本チャンになじめたかなという気持ちが、「滝谷」というこわ～いイメージに打ち勝って、今回の第４尾根に至ってしまった。

７時すぎに新穂高を出発。林道が終わって白出沢の広い河原。ずっと行くとやがて滝谷出合初めてなので藤木九三レリーフに御挨拶。滝谷の上の方には何やら険しそうな岩が見え隠れしていた。休憩後、いよいよ滝谷を詰めていく。

少し登っていくと、雄滝。右岸を２ピッチ登る。最初に腕力、そして草付きとちょっといやらしい感じだった。２ピッチめはトラバースして滝の上部に出た。そこで小休止後、しばらく行くとナメ滝、先行パーティーが見えるが落石が度々あり、じっとしてると危い所だった。ここも右岸を登り、滝を越えた。これから後はガレ場。足を置けばそこから崩れていくという、私の最も苦手とするジャンルだ。「こんな大きな石が」と思うような石でもぐらっと動く。とにかく落石しないように、それだけを考えて歩いた。

途中、少し急なところを登っている時、ぱっと顔を上げた瞬間、少し上に石が大きく見えた。とっさに頭をふせたように思うが、次の瞬間には、石を握っていたはずの手が離れて、仰向けに頭から落ちていた。ヘルメットをかぶっていたから大丈夫だったが、何が起こったのか一瞬わからなかった。肩を少し打ったようだったが、それよりも精神的な恐怖感の方が大きくなってしまい、その後は一歩一歩が本当に恐る恐るという感じになってしまった。そして、変に過敏になってしまい、自分が落石してしまったのに「恐い」と思ってその場にすくんでしまうという具合でとにかく早く終って欲しかった。

やがて沢がいくつかに分かれている所にやって来たが、もしガスっていたら、うまくC沢に入るのは、難しいだろうなと思った。左からA沢、B沢、C沢と数えて、私たちはC沢に向かった。C沢に入ると少ししっかりしたガレ場でちょっとほっとした。そして適当なところで、尾根へトラバースして、何とかスノーコル付近にたどり着いた。かなり急な斜面のトラバースだったので、緊張してしまった。コル到着１８：００。

スノコールには先着パーティーがあったので、少し上のところで、３人と２人に分れてツエルトに入った。少し傾斜があり、落ちないようザイルにつないで寝た。

２日めは、あいにくくもり。ガスっていて視界が悪い。

スノーコルを７時すぎに出発。いつの間には雨が降っていた。せっかくの登攀なのに、私はザイルの伸びる方へ続いていくのに必死だった。登り方などという余裕はなく、自分がどのあたりにいるのかなどと考えることすらできなかった。雨は本降りになり、服は濡れてしまい、

寒くなってきた。そのうち震えが止まらなくなり、指先の感覚もわからないくらいだった。他の人も寒いはずだ。とは思ったが、あんなに寒かったのは初めてだった。見かねた小林さんと内藤さんが、着がえた方がいいと言って、ツルムのコルのところで岩かげを見つけてくれた。でも、からだが凍え切っているせいか、思うように動かず、頭の働きまで鈍ってきたようで、着がえるのにもかなり手間どった。小林さんのセーターまで貸りて、ようやく寒さが少しましになったが、震えはなかなか止まらなかった。

とにかく、順番待ちなどのじっとしている時間の長さはたまらなかった。

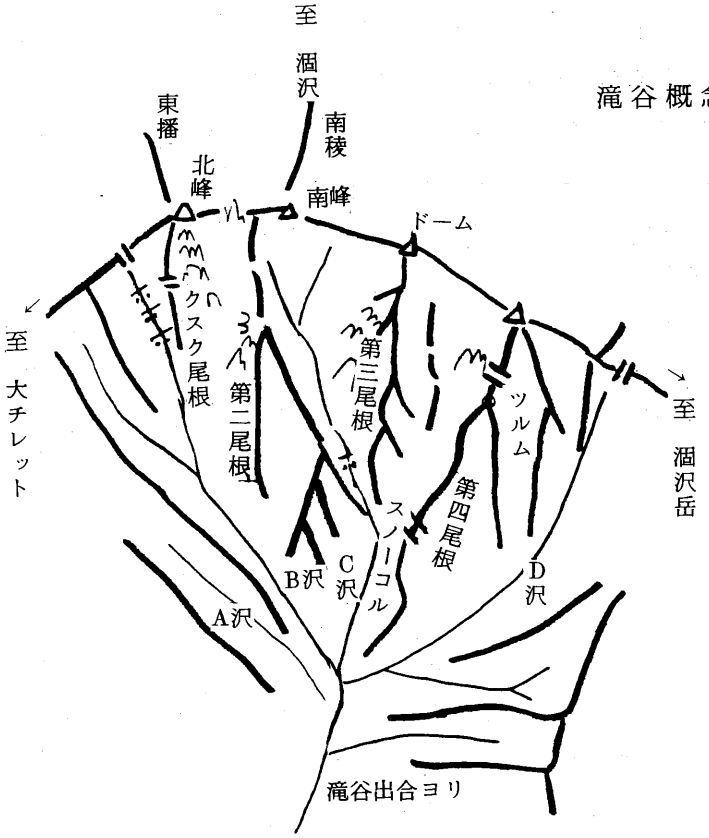
それでもようやく稜線らしきところまで出ることができた。あとは小屋までだと思うと、雨も何のその。稜線に出たのが１５：３０頃だったから８時間ほど雨の中を苦戦していたことになる。

北穂の小屋に入るとやっと生き返った気分だった。南稜で泊ったはずの内藤さん(2)と迫田さんから連絡があり奥穂の小屋におられるとのこと。とても心配をかけてしまった。

その夜は小屋のふとんに入り、しみじみと暖かさと屋根のある有難さを味わいながら眠った。

最終回、涸沢で内藤さんたちと合流し、雨のあがった道を上高地まで歩いた。

落石と雨の恐ろしさをつくづく教えられた貴重な山行となった。本当に無事で良かった。



茶臼岳――光岳縦走

国沢昭美

昭和５８年１１月３日～６日

パーティー：幸内夫妻、野上①、大西、紀、塩崎、国沢

１１月３日（晴）

井川＝畑薙才１ダム（10：30）大吊橋（11：50）ウソッコ沢（13：20）

横窪沢（15：20）

大井川鉄道は、深い谷間の山腹につけられた道をゴトゴトと走って行く。向い合って座ると膝がふれ合いそうな小さな電車であった。

井川からバスに乗り替え井川湖沿いに進むにつれて、紅葉の色合いも一段と鮮やかさを増してくる。途中の村祭りの御輿が道路をふさぎ、しばらくの間バスが通過待ちをする。
いかにも山奥へやって来たという感じであった。

バスの終点畑薙才１ダムから湖沿いに、大吊橋まで歩かなければいけない。林道を１時間位歩くのは、さして苦にはならないけれどマイカーが土埃をあげて往来するのにはまいってしまった。そのマイカー族も大吊橋までで充分満足して帰って行く。ちようど橋が、俗界との境の役を果たしているようであった。

登山者は、私達パーティーだけである。落ち葉を踏みしめながら登って行く、ヤレヤレ峠を越え、上河内沢へ入る。谷間の道は、ピーンと張りつめた冷気が心地よい。

４度吊橋を渡るとウソッコ沢小屋に着く。小屋から吊橋を渡り、鉄バジゴを登る。あとは尾根をジグザグに登って行く。この尾根を越えると横窪沢小屋である。水が豊富で、幕営に最適の場所であった。

１１月４日（曇）

横窪沢小屋（6：20）茶臼岳（10：20）易老岳（11：00）光岳小屋（15：40）

横窪沢小屋から茶臼小屋まで８００ｍの登りである。ふり返ると富士山が大きく見えている。小屋から稜線へ出ると、北は聖岳をはじめ３０００ｍの峰々が、どっしりとその姿を現している。いつか、あの山々へ登ってみたいものである。南へは、光岳の縦走路が長く続いている。

茶臼岳にて、大展望を満喫し、仁田池小屋に到る。小屋は荒廃して、今にも倒れそうであった。仁田岳は、縦走路から外れていた為、行かずに通過してしまった。希望峰から左へすぐの

所であったのに、おしいことをした。

希望峰から急な下降のあと、小さな上下をくり返し易老岳に着く。下山予定の面平へのルート偵察に行って下さった野上、幸内さんを頂上にて待つ。木々が繁り、展望はひらけなかった。易老岳のあたりは、倒木が多く踏み跡を捜しながらたどって行く。

易老岳を下って行くと小台地に出る。そこからの展望は、かなり良かった。そこから再び下りとなり光岳へ続く稜線へ登って行く。稜線が間近になった頃、雪になる。

光小屋周辺は、草原状になっていて、おおらかで気持ちのよい所であった。夏ならば、高山植物が咲き乱れるお花畑になるのだろう。

小屋にザックを置き、空身で光岳へ登る。南アルプスも、ここまで来ると木が多くて展望は今一つであった。

１１月５日（曇）

光小屋（６：３０）　イザルガ岳（7:00）易老岳（9:40）面平（12:40）

本谷口（18:20）

朝、小屋の外は、一面の雪景色。新雪を踏んで出発する。ガスで何も見えないイザルガ岳を踏んだあと、昨日と同じルートを易老岳まで登り返す。面平へ下るルートは、悪路だということなので、先頭は野上さんにおまかせする。こういう時は、山の経験がものをいうものである。高度が下るにしたがって、紅葉が赤みを増して来る。どんどん下って行くと、やがて広々とした台地に出た。面平である。

そこから再びジグザグに尾根を下って行く。紅葉が一段と鮮かさを増して来る。

遠山川にかかった壊れそうな吊橋を、キァーキァーいいながら渡ると、あとは本谷口まで、長い長い林道が続いていた。

伯　母　子　岳

紀　　千賀子

昭和５８年１２月１０日～１１日

パーティー：島田、新川、野上博司、国沢、紀

１２月１０日　南海難波駅（13:00）－高野山駅（15:00）－タクシー大股（16:00）

１２月１１日　大股（7:00）－萱小屋（7:45）－桧峠（8:50）－分岐（9:25）

－伯母子岳（9:45）－山の家（10:05）－大休止（10:35）－分岐（11:30）

－萱小屋（12:15）－昼食（12:40）－大股（13:05）－タクシー

ー高野山駅（14：37）ー難波（16：37）

タクシーで大股まで入った。途中カーブの多いドライブウエイだったせいか、少し気分が悪い。登山口のすぐそばの民宿「かわらびや」に宿をとった。

夕食は、鮎の塩焼や岩魚の煮付で、川魚がメインの豪華な食事をいただきながら、島田さんや新川さんの昔話にお酒もちよっぴりはいり上機嫌になった。

翌朝、川の音と雨の音で目をさます。まだ眠たい目をこすりながら７：００出発　少し雨は小降りになりだんだんと山深くなっていく。霧がかかって景色があまり見えないがそれでも時々のぞかせる夏虫山、古畑山、口千丈山に感動しながらの写真撮影約２時間３０分ほどで頂上に立った。頂上で、ゆっくりするひまもなくまた雨が降りだし、すぐそばの伯母子山の家に駈け込んだが、屋根がなく避難できる様な小屋でもなかったがそこで小雨になるのをまった。途中の萱小屋まで、下山しそこで昼食をとった。伯母子岳は（１３４４ｍ）の山で広葉樹が群がっておりまだまだ自然のたくさん残された山である。人に出合うこともなく優雅で、楽しい山行だった。

はじめての富士山　　吉　田　典　夫　記

僕の手におえる山ではないがこんな機会はめったにないので小林さんにつれて行ってもらうことにする。滑落、落石、アイスバーン、突風といったヤバイイメージがつよい山だけに、不安感をうち消すためにせめてアイゼンを研いでおこう。

メンバー　Ⓛ 小林、吉田良正（国鉄）　坂元（春に小林さんとヒマラヤへ行く予定）そそれと僕の４人

行動予定　御殿場口ー山頂ーお鉢めぐりー御殿場口ー帰神

日　　程　Ｓ．５９．１．１４～１６

１月１４日（土）沼津駅で仮眠し、始発で御殿場駅へ。さすがに寒い。タクシーで登山口へ向う。車に乗ってすぐ、フロントガラスいっぱいに美しい富士の姿がひろがる。

小林さんの話では去年よりもだいぶ雪がすくないらしい。夏道が出ている。自衛隊滝ケ原駐とん地をすぎ、ＢＯＡＣ航空機墜落遭難碑を通り御殿場スキー場（新五合目、１４５０ｍ）で車をおりる、天気は良い。

火山灰のゆるやかな登り、うんざりするぐらい長い、１時間半ぐらいで次郎坊につく。

ふり返ると自衛隊の演習場が広がっている、なんと雄大な景色だろう。

アイゼンをつけて、宝永山（２７００ｍ）めざして出発。すぐ目の前に見えているのだが、なかなか近づかない。結局２ピッチかかる。赤岩（高さ５０ｍ、巾２００ｍぐらい）がそそり立っている。宝永山の右側の夏道を行く。ところどころ雪がなく、アイゼンを外したり、つけ

たりする、今日は7合目の小屋（３０５０ｍ）のかげにツエルトを張る。

１５日（日）　朝2時起き、日本海を低気圧が発達しながら東進中、午後から風がつよくなるという予報、早く出発する。不要なものをデポする。1ピッチ歩くと背後から陽がのぼる。

心が洗われるようだ。9合目ぐらいから突風がふく。地下鉄が近づいてくるような音がして体がゆさぶられる。耐風姿勢でやりすごす。突風のあいまにちょこちょこと高度をかせぐ。

思うように動けない。約3時間かかって浅間神社につく。頂上は雪もすくなく、風もなく、まるで春山のようだ。富士山測候所で休けい。大ポンをうつ。気分そう快。

お鉢めぐり（約1時間）して、下山にかかる。

夏道どうしに下りる。しばらくすると突風がつよくなり何回もバランスをくずしそうになる。

風がますます強くなり、石ころが飛んでくる。発達中の低気圧のせいだろうか。

手すりにつかまって必死でおりる。荷物をデポしている7合目あたりで風は最大になり、

雪といっしょに火山灰、小石、ときには頭大の石がふってくる。当たったらおしまいだ。

僕は雪の斜面を耐風姿勢のままうしろ向きになってしか下りられない。

小林さん達よりだいぶおくれて7合目につく。雪上技術の未熟さを感じる。

小屋のかげといえども風がつよく、うかうかしていると体ごと持って行かれそうになるのでピッケルにしがみつく。小屋の屋根ごしに火山灰や小石、雪がすごい勢いでとんで行く。

今朝、出がけにデポしていた装備が風のためツエルトがひきさかれて飛んで行ってしまっている。すぐさがしに行くのは危険なので風がおさまるまで待つ。

そうこうしているうちに風もおさまりかけたので下山する。くつの片方やＥＰＩのヘッ　部分や食器などがあちこちにちらばっているので回収しながら行く。

僕はシュラフの中に不要なもの全部入れておいたのでおそらく遠くへ飛んでしまって帰ってこないだろうとなかばあきらめかけていたのだが、うまい具合に鉄柵にひっかかっているのを吉田（良正）さんが見つけてくれた。

昨日通った宝永山付近の斜面も雪のうえに火山灰がつもり黒一色に変化している。

小石まじりの突風が広大な斜面をふきおりてくるたびに耐風姿勢で迎える。

顔や頭に小石が当たってバチバチ音がする。鼻のなかや耳の穴、口のなかが砂だらけ。

まるで砂漠を旅しているようだ。

やっとのことで御殿場スキー場につく。

なにもかもが新しい体験だっただけに印象にのこる山行でした。

小林さんをはじめ皆さん、どうもありがとうございました。

・低気圧の発達状況

１３日２１時（沼津駅へ向う夜行列車の中）

黄海付近で１０１２ミリバール

１４日２１時（富士山７合目で睡眠中）

日本海ウラジオストック沖で１００８ミリバール

１５日２１時（帰りの新幹線車中）

雅内沖で９８２ミリバール

以上のように２日間で３０ミリバールも発達し冬型が強まる。

ハクサンイチゲ

七　種　山

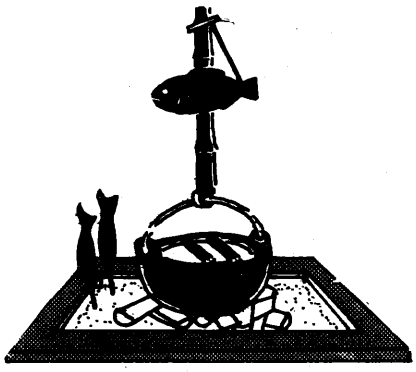
島　田　文　雄

パーティー　島田、新川

2月１９日　　福崎（10:34）→ 七種神社（11:30）→頂上（12:45）→七種神社（14:40）→福崎（16:00）

福崎駅で下車、山中に入ると道は凍りついているのでタクシーはいけるところまでという約束で出発、しかし約15分位いで道路は凍り、車は走れなくなったので下車、雪の道を七種神社に向かう。神社の横手より、テープ目印を頼りに、登行開始、坂のきつい登り道を頑張り、頂上を踏む、（６１６ｍ）。周囲の木が高く、展望がきかず残念だった。頂上の北側にある「つなぎ岩」を視いたが、積雪の為、岩の様子は、わからなかった。次の目的の七種槍へ向う。
尾根筋の膝まで没する深い雪を、交代でラッセルしながら進むうちに、目的の七種槍へ進まず七種薬師へ進んでいる事に気付き引き返す。七種槍へ向う尾根筋を、見付けたが、無理とみて縦走を中止して、登った道を引き返し、神社に帰着。遅い昼食をすませた。寒いので、ゆっくり出来ず、直ちに出発、人家があったので電話を借り、タクシーを呼んで、福崎へ帰着したのは、16：00頃だった。

後記：積雪期に七種山より七種槍又は七種薬師へ縦走する場合は、馬力のある若い人が$\frac{2}{3}$人参加して、交代にラッセルをすれば、縦走も簡単に出来ると思う。次回は、若い会員の参加を望みます。



近江アルプス 鶏冠山から狛坂廃寺跡方面

島 田 文 雄

3月3日(日) 雲／晴

パーティー：島田、新川、内藤、堀野

草津（9:40バス）上桐生（10:00）落ケ滝（10:35）（10:40） 鶏冠山（11:25）（11:30）

天狗岩手前（12:15）昼食（12:50）天狗岩頂上（13:05）（13:10） 耳岩（13:18）

茶沸観音（13:40） 見岩（14:55）狛坂磨崖仏（14:05）（14:10） 逆さ地蔵（14:55）

上桐生（15:38）バスで草津へ 草津（16:09）国鉄大阪（17:02）

空は雲が厚く、今日の山行は雨に見舞われる事を覚悟して、大阪8：25の米原行に乗車。草津よりバスで、上桐生まで行く。雨が顔に当るが傘をさす程でもない。舗装された道をしばらく進み、林道から山道にかかる。落ケ滝への道標に従う。山が、浅いので水量は少くないが20m位の落ケ滝へ到着した。面白い岩登りが出来るだろうと眺めていると、上部左手のスラッブに、リングハーケンが5/6本打ってあった。一汗かいて縦走尾根へ到達し、北へ向い鶏冠山、（491.1m）の頂上に立つ。展望は良く、眼下に琵琶湖々面が、それを隔てて薄く雪を被った比良の山波が見えていた。引き返えして陵線を南へ縦走すると、やがて異様な岩の塊りの天狗岩が見えて来た。天狗岩の手前の岩蔭で風を避けて昼食をすませる。曇り空で、じっとしていられない程寒く、早々に出発。天狗岩の巨岩の頂上へ登ってみたが畳が10枚程の広さだった。天狗岩の南側はロッククライミングのルートになっていて面白い岩登りが、出来そうだった。耳岩（543m）白石峰（585m）を通過して、往時から山岳宗教道の道しるべになっていたといわれている。僅か30cm位の茶沸観音に参る。これより引き返えし、重ね岩、国見岩（557m）を通り、谷筋を下ったところに、その昔、高麗から渡来した画師たちが、宗教的霊場として母国の技法を伝えるために、磨崖仏を彫ったといわれている大きな岩が、静かに座っていた。ここが狛坂廃寺跡である。山を下った林道から一寸外れたところに、大きな岩に地蔵さんが、逆さに彫ってあるといわれている逆さ地蔵を見学する。天気は覚悟していた雨も降らず、幸いにも絶好の日和となり、今朝出発した上桐生まで楽しく歩いた。

丹波篠山口の半国山

島田文雄

昭和60年３月11日　晴／暖

パーティー：島田、新川、武政

千ケ畑口（10:10）頂上へ向う稜線（11:00～11:25）　頂上（11:45～12:10）

千ケ畑（13:10）

半国山の麓の千ケ畑口へ車をパークし、登行開始。道は谷筋の為、凍っていて滑りやすい植林帯を急登行する。植林帯が終る頃、上空が空けて山陵に到着。灌木帯を右へ登り、クマ笹をかき分けて頂上へ到着した。（７７４．２ｍ）広々とした展望の良い山頂には、碑が建っていた。文献によれば、この碑は、磨崖碑で、右に日本大小神、左に南無釈迦大仏の二本の石柱を徒え、愛、参拝の方位に向って建っているとの事だ。地上は、雪に覆われて居て座る事も出来ず、立ったまま昼食をすませた。展望は素晴らしく、西に深山、西南に剣尾山、東南方面は妙見の山波が望見された。しかし、風が強く、じっとしていられないので早々に下山、次の目的の能勢の歌垣山へ向った。

能勢の歌垣山

歌垣農協前（13:35）頂上（14:25 ～ 14:45）農協前（15:15）

半国山よりの帰途時間が充分余っていたので、歌垣山へ登って来た。山麓の歌垣農協前へ車を止め、谷筋を登る。登り道は、成り急坂で、約50分のアルバイトで頂上へ到着した。（５５３．５ｍ）頂上三角点の個所を除き、灌木が刈り込んであったので、麓の部落や能勢町方面がよく眺められた。この山は、納勢妙見に連らなる山波の一番北方に、位置している。又山頂北陵の松林の中に、歌垣碑と高さ３ｍからある巨石の山石碑があるとの事。帰宅してから文献を見て知り、一寸残念に思っている。やはり出発前に文献等で調べて行くべきだ。

杓子岳－白馬岳

国沢昭美

昭和５９年４月２９日、３０日

パーティー：(L) 迫田、幸内、広池、馬場、大西、大西公史、国沢

４月29日　　快晴

二股（6:30）猿倉（8:00）（8:40）双子尾根、杓子岳（17:15）頂上宿舎テント場（19:00）

大糸線の線路沿いにも、まだ雪が消えずに残っていた。今冬は、本当に雪が多かったのだなあと、今さらながらおどろかされた。

白馬駅で、タクシーが二股までしか入らないというので、バスで行くことになる。二股から猿倉まで、余分な時間がかかってしまった。猿倉でアイゼンをつけ、小向日のコルへ向って出発する。お天気は、無風快晴。暑いぐらいであった。

コルにて、杓子岳へのルートを目で追ってみる。頂は、遙か彼方。行けるかなあと不安になってくる。コルから少しづつ痩せ尾根になって来た。ゆるやかな登り下りを繰りかえし高度を上げていく。２１４０ｍから３０ｍ位下り、２２７０ｍまで約１５０ｍのきつい登りである。それからは、杓子岳まで、痩せた尾根をあえぎながら登って行く。冬にスキーばかりしてトレニングを怠っていたことが悔まれる。

双子尾根と杓子屋根とが交った辺りで、ザイルの用意をする。ここから最後の登りである。両側が切れ落ちているのを出来るだけ見ないようにして、慎重に登って行く。岩と雪がミックスした急斜面の登りである。ザックの両サイドにさしたスキーが、登る度に上の斜面にあたってガンガンと音をたてる。早く頂上に着いてくれないかとそればかり思って登る。

杓子岳山頂にたどり着いた時は、本当にうれしかった。ひきつっていた顔が、笑顔になる。あとは、テント場まで雪の消えた夏道をたどればよいのだけれども、私はもうバテバテの状態で皆の一番最後を、やっとこさテント場へたどりついた。

４月３０日　　晴のち曇

テント場（5:40）　白馬山頂（6:30）　小蓮華岳（8:15）　乗鞍岳（10:15）

成城大ヒュッテ（12:15）　親の原（13:30）

今日も、お天気は良さそうである。白馬山頂まで、朝一番の登りはやっぱりしんどい。また皆より遅れてしまう。頂上からは、３６０度の展望であった。

ここからは、小蓮華岳までゆるやかな起伏が続いていた。小蓮華岳から3つ目のコブを越えた所で、杓子岳経由で運んで来たスキーをつけ白馬大池まで滑降である。何年ぶりかの登山靴でのスキー。立ったとたん2回もころぶ。それから大池まで数え切れない位ころびまくる。スキーをぬいで歩いた方が早いのではないかと思った位である。

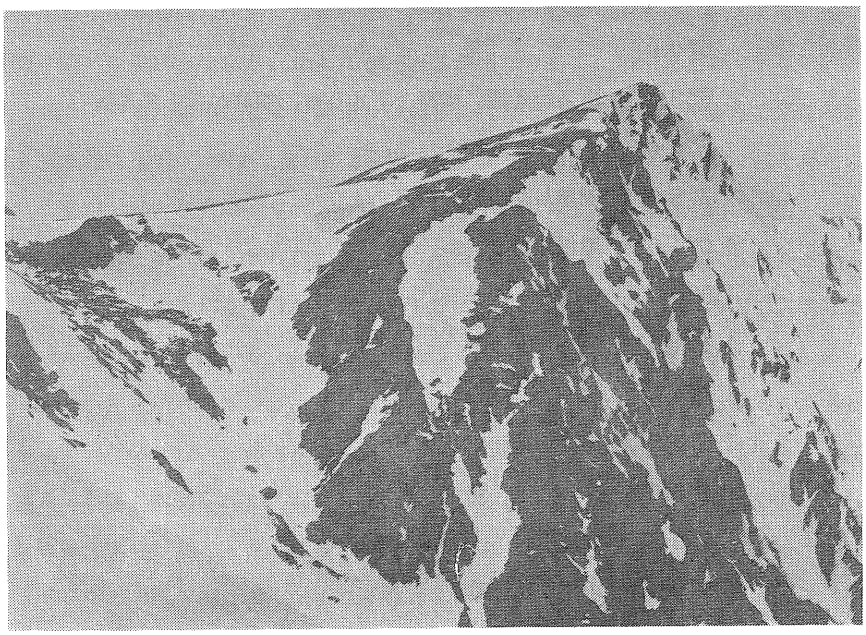
大池でスキーを再びかつぎ、乗鞍岳まで登る。今回最後の登りである。スキー鞍にはきかえていた広池さんが皆より大分遅れ、しまいにはスキーをぬいで跣で登って来た。両手にスキー鞍を持って登って来た広池さんの格好がひょうきんで、思わず笑ってしまった。

乗鞍岳にて一尾根北側へルートを振っていることがわかる。目の前に、かなり急な大斜面がひろがっている。スキーの上手な広池さんが、その斜面にすいこまれるように滑って行ってしまった。多分下で天狗原へ出られる筈である？　ルートを喬正し、乗鞍岳の大斜面を天狗原へと下る。

天狗原から成城大ヒユッテへは、ころびながらも何とか滑る。ヒユッテ下にもう一泊して、蓮華温泉から平岩へ抜ける幸内さん達のテントを設営。今日帰る私達を見送ってくれる為、皆でスキー場へ下る。ゲレンデでは、大分うまく滑れたので大満足であった。

親の原にてビールで乾杯！　バス停に戻ると乗鞍岳ではぐれた広池さんが、無事に下りて来ていた。天狗原へ出るのに大分苦労した様子であった。

トレーニング不足で、大分苦労した山行だったけれど、とっても楽しい山行でした。



白　馬　岳

東山－鳴滝山（残雪期）

米沢典之

神戸から車で3時間１５５㎞　そろそろ疲れた頃芦津の手前で満開の桜が夜目にも美しく、虫井神社の広場に仮寝の宿を借りました。沖の山林道は発電所上部より荒れて居ますが、三滝ダムを過ぎ小川を右岸に渡った処で通行不能となりました。残雪、倒木、土砂崩れの為ですが智頭町は災害があれば補修して居ると話しして居りました。大川を右岸に渡った処に倒壊した小屋があり此処で林道と別れ左の谷に入りました。雪は小屋からずっと続き２回程流れを飛んだ方が楽ですが足を痛めて居ましたので左岸をたどり少々高巻きもしました。東山から西南に派生した尾根下部緩傾斜の処で左右　水の沢も稜線迄雪が続いて居ましたが尾根を選び１３００ｍ辺りから柔いスズ竹をこいで直接頂上に達しました。眺望は良く扇の山、氷の山、三宝山、沖の山、遙か西に大山らしきもの迄残雪豊かに見わたせました。「今年は雪が多い様で20日も遅いかな」とパートナーは話して居ました。鳴滝山へは一旦沢を下りコルへ水平にトラバースし、稜線の切開きの跡をたどりました。鳴滝山頂からの帰路は南面の谷をめがけスズ竹の中を尻セードすると案外楽に雪面に柔着陸し谷筋に戻れました。標高にすれば小さな山行ですが梅、桜、桃、こぶしの花、しまった雪、柔ソスズ竹と但馬の山の一番楽しい一日だったと思います。コースタイムに付きパートナーに較べて「平地６割坂３割籔に入れば１割以下」との事です。

５９年５月４日	２１°３０′	須磨発
５月５日	０°３０′	虫井神社　泊
	６°００′	〃　発
	６°３０′	車通行不能　標高　７８０ｍ、須磨から１６４㎞
	７°００′	〃　発
	７°５５′	倒壊した小屋　標高９４０ｍ
	１０°１５′	屋根取付き
	１０°４０′	籔漕ぎ
	１１°１５′	東山頂上　着
	１１°４５′	〃　発
	１３°４５′	鳴滝山頂　着
	１４°００′	〃　発
	１５°０５′	合流点
	１５°２０′	小屋　着
	１５°３０′	〃　発
	１６°２０′	車　着

鈴鹿　仙ケ岳

島田文雄

7月21日、22日

パーティー：島田、新川、武政

7月21日(土)　晴／雲／暑　　大阪(13:50)テント場(16:30)

山麓の安楽川は、昨日の雨で、泥水が、満々と流れて居て、これから入る山の様子が、一寸気になった。果して石水淡口よりの林道は、道一杯に、流水が拡がって流れて居た。車を少々無理して進めたが、遂に前進不能となり、道端に、テントを張る。7月だというのに、日暮が特　のある悲しそうに鳴いて居た。持参のウイスキーを谷川の水で割り、夕食を楽しんだ。

7月22日(日)　雨／晴／暑

テントを叩く雨音で、目が覚める。A.M５：００起床、テント撤収、朝食、小雨の中を、左道、安楽峠分岐点の道標を右に見ながら、林道を進む。約50分で、営林省小屋に到着。小屋のすぐ横の、不動明王への道標に従い登行開始。沢はやがて、伏流となり、沢の急傾斜の直登である。ガラ場のようないやな登りで、落石に注意しなくてはいけない。不動尊のコルに着く。（右へ登ると不動尊の堂へ着くらしい）　尾根を、左へ向うと間もなく、大きな岩壁に取付く。この頃には、小雨になったり、止んだり、ガスが出たりして、皆目見当がつかない。

ホヤ笹のトンネル状の急登降を繰返しながら、次々とガスの中に、浮かんで来るピークを、幾度も越える。全身ずぶぬれとなり寒さも感じる。突然霧の中に、奇岩の仙ノ石を見付け一安心した。ここから仙ケ岳東峰（９５５ｍ）へ登ったが、ガスでなにも見えぬので直ちに、引返す。（結局主峰９６１ｍへは、登らなかった。）吊屋根の鞍部から、木帯へ入り白谷へ下る。岩のゴロゴロした狭い歩きにくい谷だったが、下るにつれて谷は開け、昨日の雨の名残りで水量が多くなり歩きにくい。途中で、コーヒーを沸し一息入れる。沢は、ますます水量が多くなり、丸木橋はほとんど流されていて、遂には靴を脱いで渡渉しなければならぬ個所もあった。大分疲れが出て来た頃には、営林省小屋へ帰りついた。里へ下った頃から空は、すっかり晴れ上り、仙ケ岳の全貌が、眺められた。尚白谷には、蝮が多く、いたる所で見かけたので注意して歩かねばならぬと思った。

テント（６：１５）営林省小屋（７：００）（７：１０）不動尾根（８：００）
仙ケ岳東峰（９：５０）営林小屋（13:05）（13:35）テント場(14:15)大阪

玉　置　山

島　田　文　雄

9月１４日～１６日

パーティー：島田、新川、野上（博）

9月14日（金）　雲／涼　　15日（土）　雲／雨／涼

天王寺（23:00P.M）　新宮着（5:17A.M）　熊野本宮（7:30）（8:20）　平岩（9:40）

折立（１０：００）民宿発（１０：３０）林道　登山道　道が違っていて引返す

工事飯場（１３：００）（１３：３０）民宿（１７：００頃）

大阪天王寺発23:00の列車で出発。翌朝5:00過ぎ新宮着。十津川方面行の一番バス(6:00)で熊野本宮大社で下車。小雨の為、社務所を借り、朝食をすませる。社務所より電話にて玉置山頂上の民宿へ今夜の宿泊を依頼するも、大分以前から宿泊させていないとの事。山頂で泊れぬとなれば、玉置山往復は結果的に無理と思われたので、急拠計画を変更して、折立より往復する事にする。折立行のバスに大分時間があったので、雨の中の熊野古道を平岩まで歩く。

折立でバスを下車。一軒しかない民宿の吉本屋へ宿泊を予約。不要な荷物を預け出発。

雨は相変らず降っている。玉置山登山口の道標に従って急な階段状の道を登る。夏草の覆い茂る道をかき分けながら約１時間半悪戦苦闘したが、遂に踏跡がなくなり前進不能となったので、引返す。林道工事の飯場が有ったので、この小屋を借り、昼食をする。工事の人に聞くと吾々は全然違った谷を　登ったらしく、玉置山へはこの飯場から、テレビアンテナ用の柱に、添って行けば、約１時間 半で頂上へ着くとの事だった。新川、野上の両君は、雨の中を山頂へ向う。登山道は、あちらこちらで、林道と交差して居たが、途中激しい雨に見舞われながら山上の神社へ到着出来たとの事。島田は工事飯場より、１人で先に下山。やはり途中で強い雨に合い工事用資材置場へ逃げ込み雨宿りした。民宿に帰り着いたのは、16:00前だったが雨が、靴の中に入り、衣服はずぶ濡れで、散々な目に会った。頂上より、新川、野上君より電話があり、車で迎えを頼んで来たので、宿の主人に頼み、頂上を踏んで居ない島田は、車に便乗して山上へ向った。山上では暮れ行く周囲の風影を楽しんで来た。又山上の社務所では、９月だというのに、置炬　が必要なくらい夜間は、冷えるとの事だ。

9月16日（日）　晴／涼

昨日の悪天候は、嘘のように好天気であった。折立発一番の大和八木行のバスで帰路についた。途中谷川の吊橋で約15分休憩見物した。

近鉄　所　尺土　阿倍野へ帰着

コ　ブ　尾　根

国　沢　昭　美

昭和５９年9月２２日～２４日

パーティー：大西、国沢

9月２２日　　曇

上高地（７：１５）岳沢（９：３０）

塩尻で目をさますと、窓の外はまだ暗い。９月も中旬になると、随分夜が長くなるものだ。白みかけた松本駅でタクシーに乗る。以前は、電車とバスの乗り継ぎで時間がかかったのに、今は上高地まで楽に入れるようになった。

上高地のバスターミナルの広場は、いつものように登山者でにぎわっていた。今日は、岳沢泊りなのだから、ちっとも急ぐことはないけれど寒くてゆっくりしていられない。

河童橋を渡り、梓川の右岸沿いの道は、工事の為別の道がつけられていた。岳沢ヒュッテのテント場まで２時間余りで到着する。２年前の夏合宿以来である。水場（奥明神沢）は、秋なので涸れていた。ヒュッテで１ℓ５０円で売っているそうだけれど、扇沢に雪渓を見つける。雪が少しづつ解けてしずくが落ちている。たっぷり時間があるのだから急ぐことない。のんびり時間をかけて、２ℓ。これで１００円もうかった！

昼食のあとコブ沢のマイナーピーク下まで偵察に出かける。雪渓が残っていて、左側の岩壁を巻いて登って行く。岩くずが多くて緊張してしまう。文献のコピーとにらめっこしながら、マイナーピークのルンゼ取付を見つけ、小雨のぱらつく中帰路につく。

9月２３日　　晴のち曇

岳沢（６：００）コブ尾根取付（６：４５）マイナーピーク（７：５５）コブ一峰（９：３０）

コブ尾根の頭（１１：００）奥穂高岳（１２：３０）岳沢（１５：１５）

ルンゼの登りは、割と時間がかかった。ハイ松帯を経て、マイナーピークに達した。コブ一峰の右下に突き上げている小沢に入る。コブの肩で、ふと扇沢へ目をやると赤いザックがあった。人気が無いのに何だか気味が悪い。コブの最上部は、切り立ったフェースの基部の左側の緩い稜を登る。左のコブ沢側が切れ落ちているのでザイルをつける。

一峰の頭から二峰のコルまで１５ *m* のアプザイレン。シュリンゲが数本かかった支点があった。大丈夫かなと言いながら、無事通過。

マイナーを越えた辺りまでは、お天気も良くて喜んでいたのにガスが出て来て展望がきかなくなってきた。ゴブ二峰は、稜線通しに行けば良かったのに、下りのことを考えて右へ巻く。それがかえってまずく、二・三峰のコルへ出るが大変だった。浮き石が多くてとても緊張してしまう。足元の大きな石がくずれて扇沢の方へ落ちていった。一瞬、ひゃっとする。

三峰からは、何だかよくわからない内に、踏み跡を捜しながら登って行くとコブの頭に着いた。お天気が良かったら、すばらしい展望がひらけたろうに、とっても残念でした。

コブの頭の広場で一休みしていると、トランシーバーで交信している人がいる。ジァンダルムとのコルに下るとザイルをつけた人達がいた。ジァンダルムのトラバースルートで女の方が滑落したとのことであった。視界が悪く、岩も濡れているので滑ったのだろうか？　無事だったら良いのにと思いながら、私達も慎重に行くことにしましょう。

初めの計画では、飛騨尾根もと欲ばっていたのだけれど、アルファールンゼは石くずだらけで下りにくそうだし、視界が悪いと取付点もわかりにくいだろう。遭難事故を聞いた直後でもあるし、コブ尾根は登れたのだからと二人の意見が一致して、奥穂へ向って出発する。ジァンは岳沢側、ロバの耳は飛騨側を巻いたようである。馬の背の切れた岩稜帯を越えると奥穂山頂に達した。お天気が良かったら、感激ひとしおだったろうに何も見えない。奥穂は初めての大西さんには気の毒であった。奥穂から紀美子平へ約１００mの下降である。重太郎新道の途中の台地で、奥穂から西穂への展望がひらける。マイナーやコブ一峰はよくわかったけれど、稜線のピーク群はよくわからなくて、大西さんと地図とにらめっこで頭を悩ます。自分達が歩いて来た所なのに何だかよくわかりませんでした。テント場に戻ると、隣に幕営していた人から、遭難した女性が亡くなったと聞かされる。扇沢にあったザックが目に浮かぶ。その方の物ではないかも知れないけれど、沢山の人達がこの山で命を落としたのであろう。

9月２４日　　晴

下りは１時間余りで上高地へ着く。朝日のあたる稜線がとってもきれいで、振り返りながら下る。河童橋まで下って来ると、稜線を白いヘリが飛んでいた。遺体の回収作業をするのだろう。

限られた日数での登山なのだから、天候を選ぶことは出来ない。語弊があるかもしれないけれど、私達は事故も無く無事に下山出来て本当に良かったと思いました。

塩　見　岳

幸内義孝

昭和５９年１１月２０日～２３日

パーティ：　(L)　大西㈫　　内藤②　　幸内

最終列車で米原迄行き、大西君の車に乗っけてもらって、一路、鹿塩迄夜道をつっぱしる。樺沢山荘へついたのは、４：００頃だった。ひと眠りしてから登ることにする。

２１日は、８：００に出発する。私達の他に３～４パーティが登山していた。どんどんぬいて、一番先を歩いている。雪も少なく好天に恵まれ、何も考えず、月影を見ながらしゃべりながら、登る。千丈岳、駒ケ岳が見え初めると稜線が近いとわかる。雪が少しづつ増して行くと、三伏峠についた。

ずっと昔、３月に４人でこの地へ来た。その時は１日で三伏峠迄登れずじまいだった。塩見岳も見ることなく、帰ったことを思いだした。今度は１日で無理すれば塩見迄行けるのではというスピードだ。三伏峠についたのは１２：３０分だ。本谷山頂上でテントをはる。13：30分。

２２日は、風雪のためどうしようと迷うが、下の方からどんどん人が上ってくる。ほな行こかということで、テントをかたづけて、一路塩見岳へ。地吹雪にしごかれながら塩見の天ぺんで写真をとる。ひさしぶりにしごかれる。おりて来て三伏峠でテントをはる。

２３日は、三伏峠から樺沢へとおりる。地元の人と一時間程、話をして帰る。

雨　乞　岳

島田文雄

9月３０日（日）晴／涼

パーティー：島田、新川、武政

武平トンネル（９：４０）愛知川源流出合（10:45)(10:55)東雨乞岳（12:30)(12:55)雨乞岳（13:10)(13:15）　武平峠（15:40）大阪

鈴鹿スカイラインの武平峠に駐車。踏跡は、あるが笹が、道を覆っていて歩きにくい道を、谷沢峠へ向う。峠を下り、愛知川源流出合に到着。ここから流れが、今迄と逆方向に変っている。小さな尾根を越えて、クラ谷へ下る。クラ谷の出合で、左に折れ沢を登る。やがて、伏流となり七沢山との、鞍部に到着した。左へ道をとる。振りかえると御在所岳や、鎌ケ岳の雄大

な姿が、見える。視界のきかない溝のような道を急登すると広々とした草原のような東雨乞岳（１２２０ｍ）に到着した。展望は素晴らしく、東に御在所岳、国見岳、鎌ケ岳又西には、綿向山の山々が目に飛びこんで来て３６０度の大パノラマの展望が、楽しめた。頂上には名古屋方面よりの先着の若い人達のグループや、単独行の人達で賑わっていた。三角点のある雨乞岳（１２３８ｍ）は、呼の間にあり、荷物を置きカメラのみ肩にして、笹の海の中を下り、再び登り約１５分で頂上に到着。ここは余り展望はよくなかったので、直ちに引き返す。三角点の奥に木立があり、小さな池があった。元の道を下山。車へ帰着したのは、１５：３０頃だった。今日はすばらしい好天気に恵まれて１日中楽しく山歩きが出来た。

七　種　薬　師　山

島　田　文　雄

１０月１４日（日）晴／曇／涼

パーティー：島田、新川

前之庄役場前（10:10）地蔵前（10:45）（10:55）３９７ｍのピーク（11:35）

４４８ｍのピーク（12:30）（12:55）頂上（13:40）（13:55）鎌尾根小休止（15:10）（15:20）

役場前バス停（16:25）姫路（17:05）

姫路９：30発の神姫バスにて、役場前で下車。三草の集落を過ぎると、養鶏場があり、板坂の集落へ通じる道の峠の左側に、地蔵さんがあった。ここから左へ折れて山道に入る。再び峠のようなところの杉の大木の鬱蒼と茂ったところに地蔵さんが、４～５体祀ってあった。ここから尾根筋の雑木にテープが巻付けてあったので、これを頼りに登る。小松と露岩のある尾根へ出たので、左へ向って進む。左前方には目ざす七種薬師が見え、右下には、板坂の部落、その向うに福崎の町が、望まれた。尾根は、岩場の痩せ尾根が続き、四等三角点（３９７，３ｍ）のピークから一つか二つのピークを過ぎ、４４８ｍのピークへ到着。先は未だ長いのでここで、昼食。しばらくは、割合に歩き易い尾根道を、進む。頂上近くの急登の道を、登り切ると薬師如来の石像の前に、到着。参詣と小休止する。ここから30／40歩登って二等三角点のある山頂（６１６．２ｍ）を踏むことが、出来た。半ば壊れかけた測量用の木の櫓があったので、登ってみたが、周囲の雑木の背が高くて、余り展望がきかなかったのは残念だった。300／400ｍ位尾根道を下り、南へ張出している尾根の頭に出る。我々は左側の尾根を下る。（右の尾根を歩けば主峯七種山へ向う。）この尾根は、鎌尾根と名付けられているが、左側は切立った岩壁で尾根の右側を、巻きながら下る。一ケ所、大きな逆層の岩場があり、瓦のような薄い石が重なって乗って居るので、慎重に降りた。間もなく右足下に、小さな池が見えだしたので、それ

を目当てに数をこいで、地道に出ることが出来た。

京都北山の片波山

島田文雄

１１月２３日（水）晴

パーティー：島田、新川他１名

大阪（18:00）鍋谷峠（12:40）鍋谷入口（13:10）池田（17:20）

地図　５万分　北小松（但し地図には７６３．１*m*のみで片波山と印刷してない）

京都市内を抜け、鞍馬を経て、花背峠を越え、地町まで車で行く。鍋谷の入口で車をパークする。植林された杉林の谷筋を登る。鬱蒼と繁った杉林の下を流れる清流が美しい。まもなく鍋谷峠へ到着。峠とは名ばかりで見透し悪く窪地のような場所だ。小休止の後、左の尾根筋を登る。踏跡もあるが木の枝や幹に巻かれたテープを頼りに、一つピークを越え、二つ目の尾根を登りきり、少し歩いて三角点であった。周囲は樹が高く、全然展望がきかなかった。京都の北山は、ほとんどの山は樹木のために展望がよくないとのことだ。時間も充分に余裕があったので、自然杉の大木の前で写真を写したりしながら、のんびりと下山した。交通の便利が悪い為か、上天気にもかかわらず、吾々三名のみで人影なく、京都北山の静けさを満喫した。
帰路の途中で常照皇寺の名刹へ参詣したが、この寺は観光ルートから外れているため、休日にもかかわらず割合静かであった。

伊賀　錫杖岳（574.7m）

島田文雄

１０月２３日（月）曇時々晴

パーティー：島田、新川、山本他１名

大阪（18:00）柚之本峠（19:50）錫杖岳頂上（11:40）（12:00）柚之木峠（13:20）

大阪（16:20）

地図　５万分　津西部

山の名にひかれて、この山へ登って来ました。大阪より車で、山麓の柚之木峠まで行き、峠から成り、急な坂道を登り頂上へ到着。大きな岩が重なり合った狭い山上だった。あいにくの曇天で、展望はあまりよくなかったが、遠く西方に霊山、南方には和泉の山波が望まれた。
大体同じ道を柚之木峠まで下山、車で帰阪。

若狭　百里ヶ岳と丹波　八が峯

島　田　文　雄

１２月８日～９日

パーティー：島田、新川、野上（博）、武政

１２月８日（土）晴／涼

茨木発（7:30）　車にて、大谷入口（11:00）尾根（12:25）昼食（13:00）百里ヶ岳頂上（13:25）（13:40）大谷入口（15:20）堂本の美川荘（16:40）泊

福井県小浜市より遠敷川に添い下根、上根、蓄産団地を経て大谷入口に車を止める。標識や目印になるものは全くないが、踏跡らしき道があるので、谷を右左と、とりながら登る。谷は北向きに流れて居るので日当りも悪く、一寸陰惨な暗い感じを受ける。小さい滝が２～３ケ所あったが、これを高巻きする。流水がぐっと減って山の腹に取付く。「ここから尾根まで２５分水場」とした小さな木札が下っていた。この辺りより雪が大分深くなって来た。尾根筋は日当りも良かったが、雪の為腰も下せない。ここで大休止して昼食をすませる。後はピークを２つばかり越えて急な坂道を登り切ると、百里ヶ岳（９３１*m*）の頂上へ到着した。雑木が大きくて四方の見晴しは余りよくなかったが、真白な加賀の白山や、伊吹山が遠望された。又北良の山波や北摂の山々も木の間越しに眺める事が出来た。往路を下り、堂本の美川荘へ車を走らせた。

１２月９日（日）晴／涼

美川荘（７：５０）五波峠（８：１５）八ケ峯頂上（１９：４５）（１０：２０）五波峠（１１：２５）昼食（１２：０５）周山　亀岡　茨木（１５：００頃）

朝方は宿のすぐ側を流れる染ケ谷川に霧がたち気温も低くかった。染ケ谷川に添って舗装された道路を車で走る。この谷の最奥に位置する染ケ谷の部落を通過した頃から、道路は地道となり走りにくい、やっとの思いで福井県、京都府境の五波峠（６００*m*）へ到着。今日はよく整備された尾根筋の道を歩くので気が楽である。尾根道からの展望も良く、写真を写したりしながら、のんびりと歩く。７０８*m*、６９１*m*のピークを越え、６９８*m*の地点で染ケ谷キャンプ場から登って来た道と出合う。この辺りからブナ、ナラの林の中に道がついていて気持ちのよい登りだった。最後の急な坂道を登り切ると三角点を中心とした、丸い草原状になった山頂（８００*m*）に到着した。この山頂には展望を遮る樹木はなく、３６０度の素晴らしい大パノラマが開けている。北には若狭湾、青葉山、西には丹渓や但馬の山々、南は京都北山、丹波高原の山々、東の眼下に京都大学演習林が拡がっていた。風もなく暖かい太陽の下でコーヒーを沸し、心ゆくまでパノラマを満喫して往路を五波峠へ引返えした。峠で昼食をすませ、車を京都府側へ走らせた。

苧　谷（おだに）

島田文雄

1月2日（火）晴

パーティー：島田、新川

三宮駅ー徳光　院ー苧谷（小さい滝が連続してある）ー天狗道ー摩耶山ー杣谷ー五毛

正月で静かな市内を、三宮駅から布引町、雲内通りを経て、舗装された山道を歩き、苧谷の入口にある法徳　院に、到着。寺の左手の谷に入る。大小二ケ所のダムを越え、少し登ると小さな滝が、連続してあり、5mと8m位の滝があったが、何れも高巻きする。ザイルを持って来て、連続した滝を登ってみるのも面白いと思う。後は開けた谷を、登って行くうちに、大きな岩壁があった。更に谷をつめて、左手の斜面に取付く、薮の連続で少々登りづらかったが、薮がすけて来て、突然に天狗道のイナズマ坂を登りきったあたりへ出た。摩耶山を経て、杣谷を下り、長峰堰堤で、テルモスの熱燗で一服。市バス五毛停留所へ帰着。

東播の善防山と笠松山

島田文雄

2月3日（日）晴時々雲

パーティー：島田、新川、武政、堀野

善坊中学校（9：50）ピーク頂上（10:55）善防山（11:05）古法華寺（11:35）（12:10）
笠松山（12：30）熊野神社（13：20）中学校（14：00）

加西市善防中学校前に車を駐車。尾根に道がついて居るらしかったが、涸谷を登る。薮コギを余儀なくさされたが、約1時間で頂上近くのピークへ到着した。小松や雑木の露岩の尾根を歩き、善防山（251m）の頂上に立ったが視界が悪く、通過する。尾根道を古法華寺まで一気に下った。この寺の本尊は、重文に指定されているとの事。空は、雲が厚くなり、一寸肌寒むかったが昼食をすませる。寺の左手より笠松山へ登る道が通じていた。尾根筋の岩は、如何にも柔らかそうで、彫刻が、しやすいように思われた。この辺りに石造りの野仏が、多くあるのもその為であろう。寺から約30分で笠松山（244.4m）の頂きに立つ。山麓の農村の、のどかな風景が眼下に見える。雑木の茂る尾根から山麓の熊野神社へ下り、今日の山あるきを終った。神社より舗装された県道を一気に　防中学校まで帰った。

白山より妙見山

新川敏夫

1月27日

パーティー：新川、堀野他1名

国鉄六甲道（8：30）本黒田駅（10：30）大蔵神社（10：55）（11：00）白山（12：20）（12：55）妙見堂（13：45）（13：55）荘厳寺（14：40）（15：00）本黒田駅（15：35）六甲道（17：30）

白山と言っても加賀の白山では無く西脇の北にある低山である。六甲トンネルを抜け中国道の西宮北から滝野、野村と加古川の流域を遡り、本黒田駅に車を置いて出発する。道を南へ山の端を廻り込んで、前坂の部落の光福寺を左へ、大蔵神社が登り口である。「白山へ何米」と標識が続いて居り、ハイキングコースになって居る。３０４米のピークを越すと展望が、開け行手に白山頂上の白い岩壁が望まれる様になる。稜線上の上り下りを続け頂上直下のコルに達すると「女子は右へ廻り込む様に」と立札がある。そのまま直登すると軽い岩登りで岩壁の上に出てしばらく登ると岩盤のピークに達する。最高峰は更に北にあるが展望と云い周囲の雰囲気としてはこちらが頂上と云える。展望は北に３つのなるい峰頭を見せる。妙見山、東は西光寺山、南は加古川沿岸の田園風景とすばらしい。冬とはいえ暖く春霞（かすみ）で遠くの山は見えないがゆっくり休憩をする。最高峰は、樹木の為展望はきかないし妙見山に掛けての縦走は少々道が悪くなる。此の辺より４、５日前の雪が残り、残雪上の踏跡を辿る内に妙見参道に出る。此ちらにも「白山へ何米」と朽ちた道標が残って居る。先づ妙見堂にお参り、すこし山腹をトラバースする。残雪の参道を行くと簡素な妙見堂がある。道は此ちら迄である。休憩して一杯やると、もう妙見山の頂上へブッシュこぎをする気がしなくなり帰るだけになってしまう。参道をもどり、笛路への峠から杉木立の中の急坂を下ると林道終点に出る。桜の老樹にかこまれ石仏が淋しく立って居る。林道をぶらぶら下り荘厳寺にお参りするだけにする。石地蔵が並ぶ苔むした石段が続き、その奥にわらぶきの本堂と多宝塔があり静かな山寺である。後は本黒旧の出発点へ開けた田園地帯を真直ぐに下るだけである。帰途経緯交差点のある「へそ公園」に寄って見る。東経１３５度北緯３５度の交差点で、日本のへそとして、西脇市が宣伝し始めて小さな公園や美術館等が出来て居る。近効のささやかな山旅の１日であった。

能　郷　白　山

島　田　文　雄

４月１３日（土）～１４日（日）

パーティー：島田、新川、小林、武政

13日　茨木（８：１０）名神高速　大垣ＩＣ　　道１５７号を経て能郷谷林道駐車（１４：００）

テント場（１５：２５）夕食　就寝（２１：００）

14日　起床（５：００）出発（５：５５）一合目（６：２５）（６：３３）二合目（７：０９）

三合目（７：５０）前山頂上（8:50）白山頂上（9:00）（小林）（10:00）（新川、武政）

（島田は頂上を踏まず9:20頃に引返えす）元の道を引返えし三合目（11:20）（11:55）

一合目（12:34）テント（13:00）（13:20）　車の駐車地点（14:00）車で帰るも途中

大渋滞　茨木（21:00）

13日（土）雨後曇

午後には雨も上るだろうと淡い望みを抱いて茨木を出発。名神大垣ＩＣから北上し、国道157号線に入る。更に北上を続け能郷の集落に到着した。今日は白山神社里宮の祭りで、県の重文に指定されている能狂言が奉納されるとかで、観光バス、自家用車で道路は、占領されていたが、どうにか村を通り抜け林道に入る。林道は暫らくは舗装されていたが、地道に変り、雪が車の進行を止めてしまった。いよいよ歩き始める。幸い雨は、あがっていた。能郷の谷は巾が広く、岩石がるいるいところがついている。大きな谷に似合わず、水量が少くない、これは上流にある多くのダムのせいであろう。最近は余り背負わぬ重荷にいささか顎を出し始めた頃に行手に大きな堰堤が見え出し、これを越して今夜のテント場へ到着した。焚火を囲み、持参のウイスキーで疲れを癒やし、雑談後21:00頃シュラフへもぐり込んだ。

14日（日）曇

テントとシュラフを通して、寒気がひしひしと肌に感じられ、４時過ぎに目が覚める。５時起床、朝食は、途中で食べるとして、紅茶一杯で出発。高度約７６０ｍの地点の流れを渡り、赤ペンキで登山口を示す矢印に従い、小尾根につけられた道を登る。傾斜が急でなかなか辛い登りである。一合目（９０５ｍ）二合目、三合目（1310ｍ）と高度を上げて行く、振りかえると能郷の谷が眼下に眺められた。三合目を過ぎた頃から雪の斜面に変る。この辺りからガスに包まれ見透しは悪い。しかし雪は、よく締っていて、持って来たワカンもライゼンも出番がなかった。やがて前山（１４９１ｍ）の頂上に到着し、ここから45度の方向転換をして頂上に続く吊尾根の最低鞍部を過ぎる、ところどころ雪庇が出ている様子である。白谷より突き上げ

て来た急斜面を登り切ると頂上であった。（小林のみ三合目から先行して9:00） 新川、武政は約1時間遅れ10:00頃に頂上へ着いた。尚島田は、頂上真下の急傾面を登りきれず引返えす。頂上はガスの為全然展望がきかず、それに加えて風が強かったので直ちに下山の途につき、全員三合目で集合してコーヒーを沸し小休止する。ここからの急な下りは股や膝に負担がかかり皆から大分遅れてテントへ帰着した。既にテントは撤収されて居た。再び重い荷物を肩に能郷の谷を下る。車で帰途についたが、樽見の淡墨桜の見物のため、大型観光バスや、自家用車が数珠つなぎとなり、道とはいえ狭い道で約2時間の渋滞を余儀なくされて、茨木へ帰着したのは21:00だった。

追記：登山中にショートスキーを背にした単独行の岐阜の人が追いついて来たが、話によると6日の日曜日には能郷の村までスキーが履けたとの事だった。

播磨　日名倉山

4月22日　（日）　雲後晴／暖

パーティー：木村、島田、新川、武政

山麓（9:40）奥海越（10:50）（11:05）防火帯（11:30）（11:40）　三の丸（12:00）二の丸（12:20）頂上（12:30）（13:15）山麓（15:10）（15:35）

草町日名倉神社横の林道を、車が入れるところまで行く。道標に従い奥海越へ通じる杉林のやや急登を登る。そのうちに船越山へ通じる町堺の山陵に達し道はゆるやかになった。笹の道を進んで行くと奥海越（８０５ｍ）へ到着し小休止する。道は三又になっていて、左へ約6㎞で船越山へ、右へ約4.5㎞で　草町へと記した道標があった。吾々は真中の道を進む。植林帯の間を縫って行く。背丈け以上の笹が雪に倒されていてその上を踏むたびに、靴がスッポリとめり込んで歩きにくい。やがて巾10ｍ位の防火帯に出て、ここで小休止、若い男女のグループが追付いて来たので、先行してもらい、薮こぎのラッセルを交代してもらった。防火帯から植林帯に入り、再び尾根へ出る。二の丸を過ぎ、最後のピークの薮をくぐり抜けて一等三角点の日名倉山の頂上（１０４５ｍ）へ到着した。頂上は兵庫県、岡山県の堺になっていて、防火帯のように木が切り開いて有った。兵庫県側は杉、岡山県側はカラ松の植林がしてあったのは、対照的で面白かった。頂上の眺めは、余り良くなく、曇っていたのが残念だったが、西方には岡山県の那岐山、東は千草町の鷹の巣高原や黒尾の山々、北側の足下には志引峠、その向うに後山が望見された。好天気なれば三室山、氷ノ山も見えると思う。頂上では、先程追越して行った若者のグループが大鍋で、肉、野菜、ウドン等を煮込んで、和気藹々と食べていた。

聞けば加古川の山岳会のメンバーとの事。神戸山岳会の若い人も、たまには、このような例会を計画に入れても良いのではないか。吾々も昼食をすませて、もと来た道を下山した。

京都北山の八丁平湿原と峰床山

11月11日（日）　曇一時雨後晴／涼

パーティー：島田、新川、武政

大悲山口（19:10）小ナメラ谷行止り（19:35）（19:40）登山口（10:10）俵坂峠（10:50）（11:00）フノ坂出合（11:30）八丁平入口（11:40）誠心花小屋跡（12:00 昼食12:25）三又路（12:35）峰床山頂上（12:55）（13:00）俵坂峠（13:30）車（14:10）

大悲山口より右折して寺谷川に添い、寺谷川とナメラ谷の出合からナメラ谷へ入る。右側に小ナメラ谷の道標があったのを、ナメラ谷と間違い車を進め、遂に前進不耗となり引返えす。大阪を出る頃から空は今にも降りそうだったが、登山開始の頃にはすっかり本降りとなった。よく踏まれたジグザッグの道を約40分で俵坂峠に到着、フノ坂へ向って下る。高圧電線の工事をしているらしく、モーターや、その他の機械の唸り声が、静寂を破って気分が台なしだ。尾越より通じている林道へ出る。この辺りで再び雨が激しく降り出した。八丁平入口とした道標に従う。八丁平は周囲を尾根に囲まれた標高約９００ｍにある高原湿原である。一寸開けたところがあって、ここに同志社大学誠心荘山小屋の跡とした看板が建っていた。ここで昼食をすませ直ちに出発。クラガリ谷から左の小さな沢の急登になり、しばらく頑張ると三叉路の尾根へ出た。これを右にとり約15分で峰床山（９７０ｍ）の頂上へ着いた。しかしガスの為全然展望なく、早々に元来た道を引返す。三叉路からは真すぐに進み、雑木林のピークを二つ程越えると俵坂峠だった。後は今朝登ったジグザグの道を走るようにして車まで帰る。再び雨が強く降り出した中を帰路についた。今月の山行は、不幸にして天気が悪かったが、山を歩いている時は小雨が止んで居たので助かった。しかし湿原地帯を歩るくのには小雨ぐらいなら、かえって風情を添えてくれたと思った。

例　会　報　告

１９８３年１０月～１９８５年４月			括孤内は当番
10月２日	妙号岩	ＲＣＴ	（小林）
４日	集会	研修所	
９日～10日	御在所岳	ＲＣＴ	（広池）
16日	不動岩	ＲＣＴ	（吉田）
23日	ロックガーデン	ＩＴＴ	（小林）
30日	菊水～摩耶山	歩荷	（国沢）
11月１日	集会	研修所	
６日	大月地獄谷～保塁岩	ＩＴＴ	（迫田）
13日	蓬来峡	ＩＴＴ	（吉田）
20日	箕谷～石峰寺		（野上）
23日	保塁岩	ＲＣＴ	
27日	菊水～摩耶	歩荷	（山本）
12月４日	長峰谷	ＩＴＴ	（岸本）
６日	集会	研修所	
11日	六甲全縦		（大西）
18日	菊水山～摩耶山	強歩	（幸内）
25日	冬山合宿準備会	岸本宅	
12月30日～４日	冬山合宿	御獄山	
１月29日	ロックガーデン	ＲＣＴ	（堀田）
２月５日	百間滝		（吉田）
７日	集会	研修所	
11日～12日	伊吹山スキー		（新川）
19日	貫井谷	沢登	（迫田）
26日	菊水山～摩耶山	歩荷	（大西）
３月４日	永ノ山、東尾根		（新川．吉田）
６日	集会	研修所	
11日	保塁岩	ＲＣＴ	（古賀）
18日～20日	個人山行		

3月25日	仁川～北山公園		（広池）
4月1日	帝釈山	集中登山	（幸内）
3日	集会	研修所	
8日	永ノ山～戸倉	スキー登山	（新川．吉田）
22日	不動岩	ＲＣＴ	（大西）
4月29日～5月6日	個人山行		
5月8日	集会	研修所	
13日	沢登		（堀田）
20日	雪彦山	ＲＣＴ	（広池）
27日	菊水山～摩耶山	歩荷	（吉田）
6月3日	六甲石切場	確保練習	（岸本）
5日	集会	研修所	
10日	妙号岩	ＲＣＴ	（小林）
17日	貫井谷	沢登	（幸内）
24日	菊水山～摩耶山～油こぶし	強歩	（大西）
7月1日	雪彦山	ＲＣＴ	（広池）
3日	集会	研修所	
8日	大月地獄谷		（迫田）
15日	不動岩	ＲＣＴ	（古賀）
22日	小頭島（拇指岳）	ＲＣＴ	（吉田）
29日	山寺尾根～保塁岩	歩荷	（種子）
8月5日	保塁岩	ＲＣＴ＆準備会	（馬場）
7日	集会	研修所	
11日～16日	夏山合宿		
19日	反省会と装備返還	研修所	
26日	武庫川遡行		（大西）
9月2日	保塁岩	ＲＣＴ	（広池）
4日	集会	研修所	
9日	不動岩	ＲＣＴ	（国沢）
15日～16日	個人山行		
23日～24日	個人山行		

9月30日	百丈岩	ＲＣＴ	（堀田）
10月２日	集会	研修所	
７日	屏風川	家族パーティ	（国沢．大西）
14日	新岩	ＲＣＴ	（馬場）
21日	蓬来峡	ＩＴＴ	（大西）
28日	菊水山～摩耶山	歩荷	（吉田）
11月４日	ロックガーデン	ＩＴＴ	（堀田）
６日	集会	研修所	
11日	保塁岩	ＲＣＴ	（国沢）
18日	箕谷～石峰寺往復		（大西）
25日	山寺尾根～最高峰～有馬	強歩	（馬場）
12月２日	新穂高	ＩＴＴ＆強歩	（吉田）
４日	集会	研修所	
９日	六甲全縦		（小林）
16日	菊水山～摩耶山	歩荷	（矢木）
23日	準備会	岸本宅	
12月30日～１月４日	冬山合宿		
１月～２月10日	個人山行		
２月17日	有馬四十八滝		（小林）
24日	個人山行		
３月３日	懇親会スキー大会	岳連主催	
５日	集会	研修所	
10日	スキーツアー		（吉田）
17日	保塁岩	ＲＣＴ	（堀田）
24日	菊水山～摩耶山	歩荷	（幸内）
31日	不動岩	ＲＣＴ	（大西）
４月２日	集会	研修所	
14日	長峰谷～保塁岩	強歩＆ＲＣＴ	（矢木）
21日	蓬来峡	ＩＴＴ	（国沢）
28日	準備会	岸本宅	

神戸山岳会・会報　No. 1 7

１９８５年9月発行

編集者　　幸内、神田

発行者　　神　戸　山　岳　会

神戸市灘区青谷町 4丁目8－15　片山　英一宅

印刷所　　甲　南　出　版　社

神戸市中央区北長狭通４丁目　私学会館内

神戸山岳会入会申し込書

氏名　　昭和　　年　　月　　日生　年令　　才　血液型

住所　　ＴＥＬ

緊急連絡先　　ＴＥＬ　　続柄

勤務先

所在　　ＴＥＬ

神戸山岳会＊＊＊＊入会の御案内＊＊＊＊＊＊＊

神戸山岳会のあらまし

昭和１５年の秋 戦時色も濃くなったころ 神戸にあった３つの登山団体を 中心に合同したものが 名称を神戸山岳会として発足しました。
しかし １６ １７年と活動したが 第２次世界大戦に多くの仲間が出ていったため 活動を停止せざるを得なかった。
そして 戦後２２年 復活を計ったのが 現在の神戸山岳会であり 日本山岳協会 兵庫県山岳連盟に加入しています。

会の要求する新人とは

山登りはきびしいスポーツであり毎日曜 例会登山を行ない登山技術向上を計っています。
最近 山登りをする人たちが 増えており これらの人たちに対して安全登山の導きができればと 念願し 新人募集をしたわけです。
そこで入会を希望される方は 最初は指導され登るのであっても 常によりよい登山を願い かつ向上を願う人であってほしいと思います。

今後の会の方針

会則にあるように あくまでスポーツとしての 高度な登山団体であります。実践を通じて 登山精神の高揚を期しております。
そして常にオールラウンドな山行を心がけています。
＊当会は家族的ムードがあり たいへんナゴヤカに山行を続けています。

例会

六甲山周辺を主に 日帰り 又は土曜日からの一泊登山を行う

集会

月１回（第１火曜日の予定） ＰＭ ７：００ より登山研修所にて 各種打合せ 報告 山行計画の検討等を行います。

会費

１ケ月 ５００円

入会について

入会を希望される方 あるいはもう少し具体的なことについて尋たい方は 集会あるいは例会に来てください。

入会の申込

募集に応じられた方は 別紙（入会申込書）に所定の事項を記入の上 会の事務所へ郵送 又は別紙の集合場所へ持参してください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊登山研集所＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
６５７ 神戸市灘区王子町２丁目２－１王子公園
ＴＥＬ ０７８ ８０１－３２６７

事務所
神戸市兵庫区会下山町 1-14-7 岸本光弘
078-521-5066